

ローカルから見る ヨーロッパ

国際関係学を学ぶ人へ

浅間哲平・森直香編



目次

はじめに.....	3
I. 異なる文化を生きる	5
国際交流は好奇心から (ダニエル・アギラル)	7
母国との距離感 (イグナシオ・キロス)	10
日本における異文化体験 (バーバラ・トロスト)	13
異文化体験とは、世界との絆を作ること (高野ベック弥生)	15
Shizuoka et moi 静岡と私 (矢田ドミニク)	19
スペインとの“出会い” (深澤伸友)	22
パリ留学で現代思想に触れる (稲田晴年)	25
ヨーロッパの街の魅力 (上野雄史)	27
スペイン語学習とわたし (森 直香)	29
ヨーロッパ留学体験記 (小谷民菜)	31
留学生の住宅事情 (浅間哲平)	33
II. 静岡からヨーロッパを発見する.....	35
演劇を通じて知るヨーロッパ、その先に見えるもの (永井健二)	37
舞台の「アトリエ」というヨーロッパ体験 (中筋朋)	40
企画展「風景画のはじまり コローから印象派へ」を巡って (深尾茅奈美)	43
世界と日本を繋ぐ Manga (フォスティン・ボドウ)	45
スペインにおける日本文学 (森 直香)	51
静岡県で楽しむフランスとヨーロッパの美食 (マルティノ・ロベル＝ジル)	55
パリ万博使節団の足跡と静岡一渋谷栄一の見聞 (宮崎晋生)	59
古いパリを歩くこと、発見すること (宮下志朗)	62
フランス海外県への誘い (シリル・メレザン)	66

はじめに

「ローカル」という日本語にはどこか「田舎っぽい」というニュアンスがつきまとうようですが、この冊子の表題にもちいたのはそのような意味をもたせるためではありません。フランス語の《local》が、ラテン語から引き継いだように、「その土地の」「土地に固有な」というそれぐらいの感覚で「ローカル」という言葉を理解してください。私たちは、静岡やそれぞれが生活する土地によって立って、ヨーロッパを見てみようとしているのです。

今いる場所からヨーロッパを見るには、なにも実際に訪れる必要はありません。なぜならば、ヨーロッパは私たちがつつかかってきた文化のなかにいやおうなく存在するからです。

むずかしい表現を使いましたが、実際は簡単なことです。私たちが食事をするビストロやバル、遊びに行く劇場や映画館、読んでいる小説やマンガ、そしてなによりも学問をする大学、これらのものはすべてなにかしら「ヨーロッパ的」である、と言えるように思います。それらがもともとヨーロッパから輸入されたものというだけではありません。身近な食べもの、遊び、芸術のなかにヨーロッパは組み込まれているのです。

その最たる例が大学です。大学のなかにヨーロッパ文化にかかわる部署があるというだけではなく、「大学」という制度そのものがヨーロッパ中世に生まれ、近代国家の成立とともに国民を育てる機関として重要な役割を果たしてきました。私たちの生活を支えている制度のそのほとんどは、ヨーロッパ近代に発明され、現代にまで影響をおよぼしているのです。

ローカルからヨーロッパを見るというのは、したがって、今私たちが営んでいる生活のなかにヨーロッパを探るという試みです。そのような目標を目指して、この冊子はおもに二つのアプローチを提案しています。

前半（第Ⅰ部）は日本（特に静岡）で生活するヨーロッパ人の手記とヨーロッパ滞在を経て静岡に戻ってきた日本人の滞在記からなります。書き手の多くが大学人・文化人ですが、それぞれの具体的な経験を語り、文化としてのヨーロッパを読者と共有することを目指して書かれています。

後半（第Ⅱ部）は2021年に静岡県立大学国際関係学部が実施した「県大×おまちゼミ」の記録からなります。詳しい内容は第Ⅱ部冒頭の紹介を

読んでみてください。静岡の「おまち」（静岡方言で市街中心部のこと）にどれほどヨーロッパが浸透しているのかがわかるでしょう。

全体を見渡すと前半はこれまで静岡という土地がどのようにしてヨーロッパ人やヨーロッパ文化を受容してきたのか、静岡とヨーロッパの伝統的友好関係に注目して書かれています。後半は現在の静岡がヨーロッパとどのように関わっているのか、アクチュアルに進行している交流の様子が見えてくるように執筆されています。

これらのエッセイを通して、私たちがいかに「ヨーロッパ」を生活しているか、感じてもらえると思います。ローカルからヨーロッパを見るとは、すなわち、過去から現在へ、人々がいかにしてヨーロッパをわがものとし、その土地の文化として受け入れてきたのか、その土地がヨーロッパ化したかを検証する試みなのです。

最後に静岡県立大学国際関係学部についても一言書いておきます。私が働いているこの学部は、国際関係学科と国際言語文化学科、二つのグループに分かれています。グローバルな世界を俯瞰し、広い視野でその全体像を把握しようとする。しかし、それだけではなく、ひとつひとつの文化を尊重し地をほうようにしてその土地を観察する。このような二つの視点を持つことが私たち静岡県立大学の国際関係学が目指すところであると考えています。

ローカルからヨーロッパを見るという行為はこの二つの見方を同時にもつことを前提としています。上から見おろしたり、地面すれすれにはいつくばったりしてみることで、私たちが生活している世界は必ずしも一様ではない、自分が抱いている世界観が絶対ではない、そういうことがだんだんとわかってくるものです。

私の場合で言えば、スイスやフランスに長く滞在しましたが、静岡にやってきたことで、ヨーロッパというものについての考え方も大きく変化しました。すでにそうとう深く理解していると思っていたヨーロッパのあれこれが、静岡という土地のあり方やそこで流れた時間によって、またなによりここに文章をよせてくださった方々との交流によって、かわっていったのだと今振り返ると思います。そのような場を提供してくれたのが静岡県立大学の国際関係学部でした。同じようにこの冊子がこれから国際関係学を学ぶ人たちの一助になればと願っています。

編者（浅間）

I. 異なる文化を生きる

第 I 部は大雑把に言うとも留学体験記が集められています。このエッセイ集のもとになったのは 2021 年 3 月に発行した「ヨーロッパ留学体験記」です。2020 年と 2021 年は、新型コロナウイルス感染症の影響で留学ができない（しにくい）期間でした。静岡県立大学国際関係学部ヨーロッパ文化コースの教員たちはそのことで学生のヨーロッパへの関心が低下するのではないかと心配し、「留学体験記」を編もうと立ち上がりました。

この冊子で読めるいくつかの文章とともに、スペイン・ドイツ・フランスへ留学した学生たちの生の声そこに記録されています。若者ならではの新鮮な視点、初めてだから味わえる日常のスリル、そして、帰国したばかりだからこそはらみもつ「熱」がそれらの文章にはみなぎっています。ぜひ、そちらも手にとって読んでみてください。

ここに掲載されている文章の書き手たちは、学生と比較すれば、齢を重ねていますし、多くが教員としてヨーロッパ言語の指導にあたっている人たちです。したがって内容も「昔話」が中心となるわけですが、しかし、集められたエッセイはその古さこそが最大の魅力であると私は感じています。それはなつかしさからくるものではなく、ほかに要因があると考えられます。

明治維新以来、私たちは「洋行」を一つの異文化体験として重要視してきました。大久保喬樹の『洋行の時代』（中公新書）がその歴史を短くまとめられています。また、「お雇い外国人」に代表されるヨーロッパの知を日本にもたらす役割を担ってきた異邦人がいたのです。そのあらましを知りたければ、梅溪昇の『お雇い外国人—明治日本の脇役たち』（講談社学術文庫）が参考になります。そのような伝統に則った営為を記録するものであるというのが一つ目の、そして、公式のとてもいえばよいのでしょうか、要因です。

このセクションの前半では、日本にやってきたヨーロッパ人がどのように日本を「発見」したのか、その苦勞と喜びが非常に具体的に語られています。後半では、日本からヨーロッパに渡り、その文化を吸収しようと格闘した人たちの記録がつづられています。

改めて集まった文章を読み直しますと、異文化を生きるのがどれほど「面倒」なことなのかがわかります。感染症の影響でますますオンライン学習

がもてはやされ、そして、それは便利、すなわちイージーなのですが、やはり自分と違うものにふれるという経験はこの面倒さこそが重要で、先人たちの文章は留学先・渡航先・滞在先で出会った厄介な出来事を詳細に語っています。やはり昔のほうが不便だったことが多く、その苦労がしのばれ、それがまたこれらの記録の魅力ともなっているわけです。つまり、文明の進歩と逆行するようなメリットが古い異文化体験には宿っている、これが二つ目の要因です。

その土地の水や食物を何年もとりつづけることで留学前とはまったくちがった体になってしまったという冗談を聞いたことがあります。ヨーロッパに広く見られるパン食文化になじめず、べつなもの（クッキーやチョコレート）を食べすぎて太ってしまう。もしくは、まったく受け入れられないことから食べるものに困り激やせしてしまう。この冗談の言っていることはそういう体の変化についてなのかもしれませんが、こういった変貌は、ある意味、異文化をくぐりぬける行為を象徴的に表しているとも考えられます。本当の意味での他者との交流は、自分をかえていく（気づかないうちにかわっていつてしまう）、そういうものなのでしょう。

したがって、ここに集められた留学記・滞在記にはハウツー的な要素はあまりありません（そのような関心には『地球の歩き方』の留学編が応えてくれますので、そちらをあたってください）。それぞれの経験は個人によって違っているものです。そして、その違いにこそ注目してほしいと私は強く思います。

異なる文化を生きるわずらわしさをこれらの文章から感じとり、なんだかたいへんだな、でも、ちょっとおもしろそうだなと思えばあなたの異文化体験はもう始まっています。このエッセイ集が目指すところは、読者の皆さんの好奇心を掻き立て、ヨーロッパについて知りたいという思いを抱くようにすることです。そしてもしそういう気持ちになったとしたら、その異なるものへの関心を大事にしてください。留学や渡航には多くの手間と費用がかかりますが、これはなんだろう？ という探求心があればなんとか乗り越えていくことができるものだからです。

異文化を学ぶとは一月・一年という単位ではなされないものです。すでに「留学」は始まっているのです。

編者（浅間）

国際交流は好奇心から

ダニエル・アギラル

数年前と比較すれば、確かに様々な事情によって海外渡航は難しくなった事実を否定できない。そして、交流である以上、すなわち人間同士の触れ合いが重要になり、恋愛と同じようにある程度の期間は遠距離で維持させる事は可能だがその期間が延びれば延びるほど、やはり…現在の日本政府は必要以上に厳しい入国（あるいは再入国）条件を設けているので、文化人として一日も早く元に戻して頂きたいのだが、それまでに我々国際交流を推進している人間は少しでも若い人の間にその興味を沸かそうと努力する義務がある気がする。

国際交流というものは文明の曙からさまざまな形で行われてきた。戦争や伝染病が盛んだった頃でも止まらなかったのも、今さらなんらかの新型肺炎が流行るからと言って止めるべきでない。なぜなら、国際交流の根源は好奇心だからだ。

好奇心を失った人間は最早人間ではなく、多細胞生物のようなものに過ぎない。予め液晶画面で用意された内容だけで満足すべきではない。主流の意見やメディアに流されずに自己判断力を育てないといつまでも周囲に振り回される人生に落ちてしまう。

国際交流は本人の強い意志があればどの時代でも可能だ。20年前に音楽家の伊福部昭先生と話をした時に1930年代にお互い辞書を引ながらスペインの音楽家と英語で文通していたことを語ってくれて、感動した。今は簡単に他人と連絡を取れるのに、たくさんの人はただの電子メールを打つことさえ「面倒臭い」と感じる世の中…聞けば、外国へ行くにも、外国語を勉強するにもどんどん興味が薄くなってきている。「スマホの機能を使えば話が通じるし文書も解読できるから、勉強しなくても良い」と思う人もいる。ところが、言葉には「意味」があるだけでなく、「心」も籠っている。意味が分かればいいというものではない。そして、このままでは人間の脳が退化してしまう危険性があるばかりか人間の「情」まで消えてしまう恐れも生じている。

私事になって恐縮だが自分は日本にいながら英語を覚えたのに、ある日、面接官を務めていた際に2年間の米国留学にもかかわらず英語はまったく

できなかった応募者を見て、驚いた。

興味さえあれば、国内でも外国の文化に触れる機会がたくさんある。博物館や図書館。国際映画祭など。遠い国でとくに消えてしまった人が考えたことの中に、自分の今の生活を良くするためのヒントが隠されているかもしれない。外国の文化を知ることによって世界観を広げたり、曲がった視線を正したり、偏見や勘違いを解消することもできる。ただ、忘れがちだが外国の文化を正しく評価するには自国の文化も知る必要がある。「日本文化はニガテなので、海外のものを」と簡単に考えてしまうと、両方とも理解できないままで終わってしまう。そして、「交流」には相互性が大事であり、自分は相手から知識を吸収するだけでなく、自分も相手に知識を伝えようとしないと理想的な交流と言えない。

さて、ここまで言うと外国の文化や国際交流なんて重苦しいと思う人がいるかも知れないが、決してそうではない。まず、学問らしい分野が大事であるものの、それに限定する必要はない。また自分の話になってしまって申し訳ないが、娯楽映画や幻想的小説の題材を選んでも世界をもっと良く理解できるしたくさんの面白い人と意見交換の場を与えられる事実を目の当たりにした。一言で言って、自分の趣味に合う交流の仕方が必ずある。

日本文化に憧れて、30年も前にこの国に住み着いた私は当初は通常の留学生などには想像ができない苦労をした。金も無く、頼る人も無く。それでももっと深く日本文化に触れたかった。本を買えないため、紙のゴミの日に何冊も拾って、貧しいアパートで難読の文字と戦った。文書の半分ぐらいしか理解できなくても最後までページをめくった。

そうやって、少しずつ型に嵌らない生き方をして、様々な職業の人達と交流したり、互いに協力しながら歩んできた。サラリーマン、公務員、芸能関係者（映画、舞台、テレビ）、大学教授、飲食店業界、作家、医師、古生物学者、メディア関係者、農家、建築家、宗教家、政治家…ヨーロッパ各国の人、南米の人。台湾の人、日本人。これはいくつかの言語を学んできて、積極的に人と話してきたお蔭でできたものであって、間違ってもスマホを弄ることだけでは作れなかった関係だ。そのたくさんの方々との交流により、幅広い世界観を得たし何かしら食べてきた。読書に於いても似たような事が言える。政治や経済の読み難い書籍でなくとも、空想小説である『素晴らしき新世界』（ハクスリー、1932年）、『1984年』（オーウェル、1949年）、『華氏451度』（ブラッドベリ、1953年）、『地球最後の男』

(マシスン、1954 年)、などを読めば、ここ数年前からの世界規模の社会変化を違う方向から検証できる。そして、さまざまな国、さまざまな時代のものを楽しんで読んできたお蔭で（スペインのコミックから日本の歌舞伎台本まで）今の翻訳家としての活躍に繋がった。スマホや PC でなんでも翻訳できると思う人は是非歌舞伎の台本をそういう形で翻訳して見て下さい。宇宙人の言語より分かり難い文書が画面に現れるに違いない。

結局、本来の形の文化が何を提供してくれるかということ、人間としての生き方に潜む「思想」と「智慧」だ。面倒に負けたら、人間性が失われる。積極的に自国の文化、外国の文化に触れてみて下さい。きっと、いい事がある。たくさんの方が道を教えてくれる。

(Daniel Aguilar 映画史研究家)

近年の仕事

サン・セバスティアン国際映画祭駐日デレゲート

『大木勇造・人生最大の決戦』（石井良和監督、近日公開）出演

Aguilar, Daniel, *Vampiros en Japón - Sangre de Occidente* (本朝の吸血鬼・泰西之血脈), Gijón, Satori Ediciones, 2020.

Edogawa Rampo, *Crímenes selectos* (江戸川乱歩短編集・翻訳), Gijón, Satori Ediciones, 2021.

VV. AA., *Samuráis, guerreros y héroes en las obras maestras del ukiyo-e* (浮世絵で見る！英雄豪傑図鑑・翻訳), Gijón, Satori Ediciones, 2022.

ダニエル先生のウェブページはこちら



母国との距離感

イグナシオ・キロス

万一生粋のヨーロッパ人が「私はヨーロッパを遠く感じる」と言ったらきっと驚かれるだろう。しかし、スペインで生まれ育った私は正にその通りである。日本に移り住んで13年、ヨーロッパとの間に物理的な距離ができたことは言うまでもないが、時間が経つにつれ、向こうのニュース、映画、政治などをあたかも遙か遠い別世界からの話のように聞こえてくるようになった。異国に長く滞在すると、恐らく誰でもが似たようなことを感じるかもしれない。とはいえ、私は上記に述べた「遠さ」はより人生観的な距離、あるいは心の根底にある気持ちを表すといえるだろう。

来日してから多くの人に「日本に来た理由は何ですか？」と聞かれるようになったが、なぜか毎回違う答えをしているような気がする。「学問的な目標を達するため」「日本文化が好き」「日本人は礼儀正しい」「自然が多いし治安がいい」などの中から、その日の自分の気分で、または相手との上下関係などを考慮したうえで、その相手にもっとも納得してもらえそうな回答を選んでそれを発言していた。もちろん、すべてはある程度正しい答えとなるだろうが、不思議なことにその一つを口にするたびに、同時に頭の中で「本当にそうなのか」という別の声も聞こえてくる。確かに、人生における決断の根本的な理由は本人が知らない場合もあるようだ。そういう意味では、今の私には先ほどの質問に対するもっとも正直で、かつ正確となる回答は「日本は私に住み心地のいい場所だから」ということである。ただ、そういった住み心地の良さを感じさせる物は一体どこに根ざしているのだろうか。その感覚のきっかけとなる要因はいろいろ考えられるが、その中でここに注目したいのは、「ここは自分の話が伝わるんだ！」という感覚である。それは日本語が上手かどうかではなく、相手とまともな会話ができるかどうかという意味で取り上げているのである。それは具体的にどういうことかを説明するために、まず私の生い立ちについて少し一言触れておきたいと思う。

私は母国であるスペインが大好きだし、幼いころの楽しい思い出もたくさんある。とはいっても、たまに周りとうまく溶け込めないと感じることもあり、友達と遊んだり話したりしていると「どうして私の言っているこ

とが伝わらないだろう」と自問することが多くなってきた。同じ母国語なのだから、自分の気持ちを十分に伝えることができるはずなのに、それができないのはどうみても不思議なものである。しかし、自分は実際にずっとそう感じていた。後にわかったことだが、多くの場合は自分の話が通じないより実際に起きていたのは相手が私の話を全く聞いてくれていないということだった。特に集団の中では、何かを伝えようとしても、途中で遮られたり、無視されたりすることが多かった。それが自分の性格に起因しているように思えたので、解決できない問題だと思った。当時の自分の世界観がスペインに限られていたため、どこにいても何も変わらないだろうと思った。

しかし、日本に来たらまったく違う人間関係を体験できた。日本語が下手な最初の頃でも、会話中に「この人は私が伝えようとしていることを一生懸命理解しようとしてくれているんだな」と実感することが何度もあった。その後、本格的に日本語を勉強して上達していくと、当然会話中に自分の話す時間が長くなったが、相手がいつも話す順番を守り、きちんと話を聞いてくれていた。話を遮られることに慣れている私にとって、不思議な体験だったが、極めて嬉しかった。相手の話をきちんと聞いて会話するというのが、恐らく日本人には当たり前のことだろうが、私から見れば他の地域では必ずしもそうではない。私はスペインだけでなくフランスにも住んだことがあるが、その点ではスペインとそれほど変わらない気がする。そういう意味では、私はいつもヨーロッパに対して精神的距離、または「遠さ」を感じるのが不思議なことではないだろう。心理学的な知識があまりないのだが、自分の話がほとんど通じないようでは、その地域での居場所がなくなってしまうというのを感じるのが当然である。

逆に、文化も言語も価値観も違うのに、私は日本が身近に感じられる。重要な理由として、日本ではよく心を通わせる会話ができるからであろう。確かに、教師としてスペイン語を教えている私は生徒と話すとき上下関係で気にされることもあるだろうが、上下関係がないときでも、一般的にまともな会話ができると感じられる。ここでは「感じる」という語をハイライトすべきだと思い、なぜなら自分の話が伝わったときは、頭に残る知的な満足感ではなく、体全体で感じられる安堵感を味わうことができたからである。しかも、そうした安堵感は長い目で見れば報われたことになる。というのは、いつの間にか、「あれ？ やっと自分の考えを表現できるように

なったんじゃない？」と思うようになったからである。確かに、日本に来てから、日本語だけでなく、母国語スペイン語の表現力、言葉遣い、文章を想像する力でも向上した気がする。自分の存在感も少し高まったと言っても過言ではないだろう。そういう意味では、いつも日本に感謝している。

だからといって、ここでどんな人にも日本に住むことを勧めているわけではない。上記の話はあくまで外国人の私の個人的な経験であり、実際に日本で精神的な圧迫感を感じている日本人や外国人もいるかもしれない。少なくともここで留学を考えている学生などにはおすすりできることは、いろいろな地域や国を体験・生活し、自分が心地のいいと感じる場所を探ってみることである。特にかつての私のように自分の国に「居場所がない」と感じている学生に、留学を勧めている。ヨーロッパなどに留学し、そこで言語を学び、生活し、問題にぶつかり、集団に溶け込もうとすることは、将来には貴重な経験になると思う。その後、その環境が自分にぴったりだと思えば、現地で長期滞在をすればいいし、逆に長期滞在しても現地に馴染めないだろうと思えば、もちろん日本に帰って定住すればよいのである。本人が体験後に感じたことであれば、どちらも正解になりうる。ただ、そういう決断の前提になるのは、必ず具体的な経験であるといえる。住み心地の良さというのは、やはり一人ひとり違うものだから、誰かにどうこう言えるものではない。自分で体験してみるしかないのである。

(Ignacio Quirós スペイン語講師・日本研究者)

日本における異文化体験

バーバラ・トロスト

私は、ドイツで日本人の男性と出会い、結婚したことがきっかけで日本に来ることになりました。これまではヨーロッパ圏で生活していたため、日本という国があまりにも遠くにあるように感じており、自分が日本に住むことも、日本に行くこと自体も全く想像していませんでした。結婚してから彼の育った国である日本に少しずつ興味を抱き、日本についてもっと理解するために日本に来ました。日本に来るまでは、日本人の女性が毎日着物を着ていて、みんな畳のある家に住んでいると思っていたので、日本について非常に無知で、驚くほど軽い気持ちで日本にきたことがわかっていただけだと思います。

日本で初めて住んだ家は、掛川の山奥にありました。日本に着いた初日に、大阪空港に到着してから、浜松まで新幹線で移動しました。そこから、車で掛川の山奥まで移動したのですが、浜松から遠ざかるほど暗くなる景色に自分は一体どんどころへ向かっているのかと、不安を抱いたことを覚えています。夜中に引越し先の家に着き、古びた扉を開けると玄関の床は土でした。トトロのおばあちゃんの家のような感じです。ドイツとは違う様式の家に住むことは理解していましたが、床が土であることに対しては、こんなにも生活が違うものかと衝撃を受けました。この家では、お風呂がドラム缶で、暖房やヒーターもなく、生活が本当に大変だったのでちに掛川の市内に引っ越すことになりました。

もう少しこの家に住んでいた頃の話の続けると、この家に住んでいた頃は近所に住む年配の方々が、よく遊びに来てくれていました。いつも私に話しかけてくれたのですが、私が日本語を理解できずにいると、私が聞こえていないと思ったようで、どんどん私に近づいてきて大きな声で話し出すので、日本語を勉強しないといけないと思うようになりました。

市内に引っ越してから、日本語を勉強し始めました。初めは、日本語教室で教わった会話を様々な場所で練習していました。買い物の際に使う会話を習ったら、必ず買い物に行って実際に文章や単語を使ってみるという感じでした。私は日本語4技能の中で、話す力が真っ先に上達したのですが、実際に会話をしてみるのが上達に効果的だったように思います。

また、日本語を勉強する上で、オノマトペにとっても困惑しました。ドイ

ツ語では、オノマトペのような状態や動きを音で表現する言葉は、子供が使うものであり、一般的に大人が使う言葉ではありません。そのため私の感覚では、「ペトペト」や「グチュグチュ」とかいった音が何らかの意味をなすことが理解できませんでしたし、オノマトペを使って会話をする大人たちを見て、どうして子供用の言葉で会話をしているのだろうかという疑問に思っていました。

漢字を勉強することに関しては、日本に来た当初から非常に苦労しました。新聞や看板などの漢字は読むことができるようになってきましたが、日本に長年住んでいる今でも、手書きの漢字を読むことには苦労します。このように、初めは日本語で生活することに苦労しましたが、段々日本語を理解できるようになり、日本語で意思表示ができるようになってから友達もでき、日本での生活が楽しくなりました。

日本に来たばかりの頃から思えばもう 33 年も経ってしまっているのですが、振り返ってみると、日本に来て私が体験したことは、楽しいことばかりではありませんでした。むしろ来たばかりの頃は苦しいことの方が多かったかもしれません。それでも私がこれまで日本に住み続けているのは、日本特有の文化に深く関わっていった経験があるからだと思います。最初に私が住んだ家は、当時の多くの日本人よりも「日本的な」生活であったと思いますし、その生活の中で体験した食生活も私が慣れ親しんだものとはかけ離れていました。最初は拒否反応がありましたが、自ら無理やり日本生活に浸ったことで、今では日本の食文化の虜になり、ドイツに帰国しても日本食が食べたいがために日本に戻りたくなくなってしまうこともあります。

近年では、物や生活様式もグローバル化しているので、他の国にいながら日本の食べ物を食べたり、日本の友達と交流を続けることは難しいことではありません。しかし、私は他の国の魅力を理解するためには、その国の文化にどっぷり浸かる必要があると思います。このご時世で海外に行くことは中々難しいかもしれませんが、今後もし海外に行く人がいれば、日本でできる生活をするのではなく、その国でしかできない体験を自ら進んで試してみることをお勧めします。日本に住むつもりも全くなかった私がもう 33 年も日本に住んでいるのですから、人生が思っていた方向と全く違う方向に進むこともあります。自分の置かれた状況で前向きに楽しむことが重要だと思います。

(Trost Barbar ドイツ語講師)

異文化体験とは、世界との絆を作ること

高野ベック弥生

今回のお話は、去年11月のZoomでの講義「音楽芸術と言語を通じて」[2021年11月18日開催]に繋がると思います。その後、皆様の素敵な感想文を読ませて頂き、とても嬉しく思いました。色々な思いがこもっていました。そして、長い講演にも関わらず、皆さまが本当に熱心に私のお話しをお聞きくださった事が良く伝わりました。今回も、やや繰り返しの部分もありますが、皆様のお役に立つ事ができればこんなに嬉しい事はありません。

私はこの冊子に寄稿していらっしゃる他の方々とは違って、留学生としてではなく、ドイツで幼い頃から育ちました。ですから、ドイツ人は日本をどう思っているのか、日本の何を知っているのか、という事を少しは説明できると思っています。つまり、子供の頃からドイツの大人達に何か勘違いされているのではないかと思うと、説明したくなりました。きっと、私自身、ドイツの教育で「自分をアピールする事」がいかに大事な事であるかを学んでいたからだと思います。これは日本人にとって意外な事でしょう。ですが、これからは世界がどんどん国際化して行く中で、日本人もそう言う事に慣れて行く必要があると考えています。そこで私はヨーロッパ人に「日本は西洋人が思っている以上に違う国である。従ってたとえ、一度日本に行った事がある人でも、どこが違うのかを理解するのは難しい事でしょう」と伝えます。

今は世界中がコロナと戦っています。ワクチンは先に作る国が出来ただけ早く他国にも送るよう努力しています。世界がみんな同じ問題を抱えている中で、自分の国だけを守っても、この菌はまた外から入って来てしまいます。ですから、世界中の皆さんの協力が必要なのです。しかしまだ、もっと大きな問題があります。それは温暖化の問題です。これからもまだどんな問題があるか分かりませんが、その為には情報が益々大切になります。自分から積極的に行動する為には、先ずアクティブに世界中から情報を集める事です。その為には他人の翻訳に頼るのではなく、自分の語学力が必要なのです。現代、他の国ではどう考えているのか、どんな工夫をしているのかを直接ネットで繋ぐことで話し合いや相談ができます。それに

はやはり、ネットワークを作って置く事が大切です。例えば、大学時代の仲間、研究室の同僚、学問専門のネットワーク等です。ちなみに私は語学の勉強に色々なソーシャル・ネットワークを利用しています。

現在、ドイツ人は「私はドイツ人で、ヨーロッパ人です」と言うのですが、それはどう言う意味かを日本人にも体験して欲しいと思います。実際、異文化で育った人間は何を大事にしているのかは、現地で経験してみないと分かりません。そして、他の文化を理解する事で、はじめて自分の文化の特徴が分かり、誇れる事、足りない事が見えて来るのです。

ドイツ住民は現在 30%が外国の出身かその 2 世、3 世です。ドイツ語の他、自分たちの親の言葉も話せます。そして、大抵のドイツ人は英語がかなり達者です。外国人学生率は 30.1%となっていますが、それには 2 世、3 世は含まれていないので、全体的に見たら半分近くが他国文化の出身者ではないでしょうか。でも学生達は、いちいちそんなことを気にしてはいません。私も学生時代、初めて、「あなたは日本人だから」と言われなくなったのです。今考えてみると素晴らしい事です。どの国の人でも皆平等である。これが本当の国際社会だと思います。

私はアメリカのシカゴの音楽祭に 5 週間招待された経験があります。アメリカで驚いたのは、私は日本人としてではなく「ドイツの人間」と見られていたことです。「どうして、私はドイツの人と思うのですか？」と聞いたら返事は「あなたの英語のアクセントがドイツ人のアクセントだから」でした。なるほど、アメリカで、何人かの日本人の顔をして、日本人の名前の人に出会いましたが、日本語が全く分からないアメリカ人でした。

普通ドイツでは「あなたはドイツで育って、元々はどこから来たの？」と聞かれます。アメリカではそれがありません。実際、アメリカ人はインディアンをのぞいて、もともと外から来た者ばかりだからですね。

大学を卒業して、また「普通のドイツ社会」に戻ったのですが、やっぱり、大学の周りの社会はそれほど国際化していなかった事に気づかされました。でも、一度経験した理想とは、夢として自分の中に残る物だと思います。これは約 30 年前のお話ですが、今は大分変わりました。というのは、今は昔と違って、違う伝統や習慣が *diverse* (さまざま、ダイバーシティー) であって、それぞれ違う経験をして、違う意見でも、お互い尊重し合う国を作っていこうと言う努力をしています。これがデモクラシーの根本的なやり方だと思います。ちなみに現在、音楽大学の外国人学生率はす

でに 70%ぐらいになっています。

こうして色々な伝統や習慣の中で暮らしていると、自然に「自分」という存在を意識するようになります。日本の留学生も「自分とは誰？」と言う質問もするようになるかもしれません。ですから、海外での冒険とは、自分を見つける体験です。冒険には、ちょっとした勇氣は必要ですが、必ず人生のプラスになるでしょう。

そして、学問をするためには、日本人の感覚だけではなく、他国の人の意見や考え方を知る事で、また違う視点から物事を見て、面白い発見ができたり、学んだりする事ができるでしょう。

EU 作りはまだ途中です。今後 EU はどういう形になっていくのでしょうか。そういう歴史的な時代の中に我々は生きているのだと言うことを常に意識しています。私はドイツが政治の関係で二つに分かれていた事を今でもよく覚えています。国が分かれているという事がどんなに難しく苦しい状態であるか、東ドイツからあまり遠くないゲッティンゲンの町で育った私は、よく知っています。あの頃は、「ドイツはドイツ人の国」という意識がまだ強かったです。その後、1989年に壁がなくなり、さらにその後、ヨーロッパの国境もなくなりました。そして、ヨーロッパ連合が拡大する度に、新しい国からドイツへ学生や仕事に人々が来るようになりました。ですから、この 30年でドイツと人間がかなり変わりました。その結果、ドイツだけの政治や社会の話だけではなく、周りの政治や社会についてのニュースも常に聞こえて来るようになりました。

ヨーロッパの歴史は一つです。そして、アメリカと違って、とても古い歴史があります。欧州連合ができてから益々そう感じる事ができます。しかしこれからのヨーロッパはどんな形になって行くのでしょうか。まだまだこれからの課題が沢山残っています。例えば、今後、旧ソ連の国々とどう関わって行くかです。

こう言うドイツから見る日本は、私にとって特別に見えます。他の国とは全く違う伝統や言葉、仏教の他に神道と言う日本独特の宗教もあります。こういう日本を守りたいと言うのが私の熱い気持ちです。ですが、日本もこれからの時代では地球の各国との絆を強めていかなくてはならないと思います。島国の日本はどうやったら他の国と上手く関係を作って行くのでしょうか。もしかしたら、ヨーロッパへ来れば、国と国がどうやっているのかが、自分の国ではないので、客観的に自然と見えて来るのではないの

でしょうか？ 例えば、私が「ドイツを日本人の目」と同時に「日本をドイツ人の目」で見るように。

実際、人はみんな同じ人間です。そこで、私が子供の頃は、「日本人もドイツ人も同じ人間なのだから、共通点があるはず」と思っていました。ですから、「お互い説明さえすれば、理解もできるようになる」という事を子供なりに考えていました。理想の思考というしかないです。ですが、異文化同士であるからこそ、コミュニケーションがなければ、それぞれの気持ちは伝わりません。これからも、みんなが努力してコミュニケーションをとっていけば、少しでも理想に近づけるのではないのでしょうか。これは、私が大人になった今でも望んでいる事です。

(たかの・べっく・やよい ピアニスト)

日本は長いですか？ とよく聞かれます。長いです。最近は細かい数字を言わないで、30年以上とぼやかすようになりました（正確な数字がすぐに出て来ないのも事実です）。日本は住みやすいですか？ とも聞かれます。この質問への返事は本当はもうちょっと複雑になりますが、立ち話では議論することまで期待されていませので、「はい、とても住みやすいです！」と言って済ませます。30年前の日本と今の日本、30年前の私と今の私は大分変わりましたが、変わらないのはずっと静岡に幸せに暮らしていることです。

出身は南フランスの静岡の姉妹都市カンヌの近くのニースです。フランスの中で一番温暖な気候に恵まれていて、静岡に似ています。最初は浜松の北にある天龍に住んでいました。その当時、経験したことのない「田舎」でした。珍しい外国人に子供たちが指を差し、大人には遠慮されました。孤独なスタートでしたが、静岡の人の心は温かく、すぐに友達ができました。面白いハプニングですが、いつもの様に買い物に行ったある日、いきなり4、5人の女性に声をかけられて「プチ」奇跡が起きました。エプロンをかけたまま出かけてしまっていたのでした。身近に感じられて、最初のステップを踏み出すことが出来たのでしょうかね。

天竜は夏が暑く、冬は寒く、日本の昔のこたつなどのライフスタイルに体が慣れていなくて生まれて初めて霜焼けができました。セントラルヒーティングで家全体が温まっていることに体が慣れていたのでしょう。風も強かったので、静岡市に来た時には穏やかに感じました。

日本に来てびっくりしたことはたくさんありますが、まず、パリの大学で学んだ日本語と実際話されている日本語は同じ言語と思えないほど違って聞こえて、理解しにくかったことです。昔、英語にはそれほど困らなかったのに。大学で学ぶ外国語はどうしてもスタンダードか書き言葉に近い丁寧な言葉です。自分の言っていることは理解されますが、話し言葉をこちらが理解するためには、新しい単語、表現を覚える必要があります。ベースになる知識があれば、慣れるのは早いものです。この順番で言語を習得することは望ましいと思います。

さて、驚いたことの話の続きですが、富士山の素晴らしい姿です。毎年何枚写真を撮っても、飽きません。が、どこから撮ろうとしても電線が邪魔しています。街の空を見上げる時の風景にも驚いたりしました。電線が多く、大きなクモの巣の下にいるような印象でした。

でも足元を見ると街は奇麗で、清潔です。逆に美しい自然の中を散歩するときに、ゴミが捨てられているのを見るとがっかりするものです。不思議なのですが、フランスでは逆なのです。自然がきれいで、街は恥ずかしいくらい汚れています。公園、海岸などにゴミ箱が設置されていて、街は昼間も夜間も清掃トラック、清掃バイクに車道と歩道が掃除されていますので、多少汚しても大丈夫と思っているのでしょうか。

静岡の静かな丘の上に住んでいます。考えてみればフランスでもほとんど同じような丘の上で暮らしていました。行きたい時に海や山、雪山まで遊びに行けるのも自分にとっては大事な贅沢です。

今の静かな丘に移動する前に6年間三保にいました。そこで大好きな海を存分に楽しんで、大好きな乗馬も楽しむことができました。ええ？ 三保で乗馬？ そうです、ただで。性格の悪い馬に持ち主が困っていて、乗ってくださると助かりますと言われたのです。これほど運のいいことはないでしょう。運命を感じます。

散歩中に偶然見つけたエレヌ・ジュグラリスの碑も新しい付き合いの始まりでした。近くに、フランス語の詩が刻んである石があるなんて、びっくりしますね。ジュグラリスという名前も身近に響きました。ニースでよく出会う名前です。私にとって特に印象が強かったジュグラリスさんは、私の中学校の英語の先生で、強いフランス語なまりで英語を話すことで有名でした。

エレヌの存在を初めて知ったとき、戦後の三保の住民なみに感動しました。フランスのダンサーで、能の音楽に魅了され、「羽衣伝説」を知り、独学で能を研究し、手作りのマスクと衣装などを使い、各地で公演しました。三保の松原に憧れていたけれども、訪れることなく35歳で亡くなりました。白血病でした。

死後、*Le Figaro* の新聞記者であった夫がエレヌの遺髪を持って三保の松原を訪れました。フランスで資料が少ない中で、日本の文化と芸術を一生懸命研究し、各地で紹介した話に共感した地域住民により建てられたのがエレヌの碑です。碑の下にはエレヌの遺髪が納められています。毎

年、羽衣祭と薪能に訪れる大使館の方たちの通訳を最近まで勤めていました。長い付き合いで、有難く貴重な経験でした。

静岡の住民は温和で、マイペースで、のんびりしているように感じ、急かされなくて暮らせる気がしています。問題があればお互いに尊重しながらスムーズに解決し、ストレスのない生活ができる気がします。人が陽気で明るいのは南フランスに近いですが、フランスの場合はそれほど穏やかではなく、正直に、ずばずば言うし、トゲトゲした雰囲気而努力して隠さない、ありのままの付き合いです。フランスではメリハリがあって、感じの悪い店員もいる中、優しい言葉をかけてくれたらラッキーで、その言葉がここからのものであることも確実なので嬉しいものです。フランスに帰ると目が覚めて、自由な雰囲気を味わいますが静岡に帰るとホッとします。

まだまだ未永く静岡で平和に暮らし、さまざまな出会い、発見と感動をしたいです。

(Dominique Yata フランス語講師)

スペインとの“出会い”

深澤伸友

私は静岡市出身の深澤伸友と申します。大学でスペイン語を学び、卒業後は今のことばでいう“パラレルキャリア”をずっと続けてきました。大学受験予備校や医学部専門予備校で講師をしながら、1980年名古屋を拠点に結成した「劇団クセック ACT」で演劇活動をして、いわゆる“二足のわらじ”を履き現在に至ります。私自身、2008年 Performing Arts Project 「PAP・でらしね」を設立し、日本であまり上演されない中南米の演劇や小説と英国のハロルド・ピンターの戯曲を翻訳上演しています。「劇団クセック ACT」と「PAP・でらしね」の演劇に関心のある方は、舞台動画もアップロードされている劇団の H.P. (<http://www.ksec-act.com>) をご覧ください。

学生時代の私は、英語劇やスペイン語劇のサークル活動に日々明け暮れました。しかし、アメリカのリアリズム劇やシェイクスピアにはあまり興味が湧かず、スペインのガルシア・ロルカとフェルナンド・アラバールの戯曲に魅了され読みあさりしました。特に当時フランコ将軍によるファシズム体制のスペインからパリに亡命し、フランス語で書いていたアラバールの“不思議な戯曲”との出会いが、その後の“わたし”を決めました。それはアラバールを初めて日本に紹介し、彼の戯曲を翻訳出版した「文学座」の若林彰氏に出会ったからです。私は何度も上京し、「スペインは演劇の宝庫ですよ！」と言う氏から海外の新しい演劇について学びました。若林氏は1974年に「アラバール74」というイベントを開催、アラバールを日本に招いて彼の舞台も製作しました。

一方、私は若林氏が設立した「国際青年演劇センター」(KSEC)に所属し、1974年5月、KSECの海外公演スタッフとして「ギリシア国際文化芸術祭」に参加しました。アテネやクレタ島でKSECは、芥川龍之介の「羅生門」を舞踊劇として上演し喝采を浴びました。芸術祭に参加した地元ギリシアの美しいダンサーたち、シチリア島から来た陽気なイタリア人、ポーランドの山岳地帯ザコパネの若者たちと私の拙い英語で話した記憶が今でもよみがえります。生れて初めての海外で、当時としてはまだ珍しい民間レベルでの国際交流や異文化を肌で感じてワクワクしました。

約1ヶ月のギリシア公演後、帰国するKSECのメンバーを見送ったあと、

ミュージカルや映画の『日曜はダメよ』で有名なピレウスという港町から、トルコのイスタンブールを启航した格安クルーズ船のひとり旅でスペインのバルセロナ港に上陸しました。その後1年間、アントニオ・ガウディやサルバドール・ダリ、ジョアン・ミロなど芸術家の街・バルセロナやサラマンカ大学で演劇と映画を学びました。

1975年に帰国後も演劇活動を続け、1980年に劇団クセック ACT の結成に参加。1990年ニューヨーク公演と2002年初のスペインの「アルマグロ国際古典演劇祭」での公演で制作を担当。2014年『オルメドの騎士』スペイン公演には音響スタッフとして参加しました。その後、2018年2月、劇団クセック ACT はマドリーの国立劇場に招へいされ、ロルカの『観客』というスペイン人でも難しいと言われる作品を上演し、演劇評論家やマドリ一っ子たちの度肝を抜きました。

直近の私のヨーロッパとの“出会い”は、コロナ禍直前の2019年11月のスペインでした。この旅行で印象に残ったのは、かつて何度か鑑賞したマドリーの「ソフィア王妃芸術センター」のパブロ・ピカソの《ゲルニカ》と、45年ぶりに訪れたロルカの故郷グラナダでした。ロルカ記念館「ウエルタ・デ・サン・ビセンテ」には初めて行きました。そこで偶然情報を得て、ちょうど開催中の「アモール・ロルカ展」を急ぎよ訪問し、閉館ぎりぎりまでロルカを貪り尽くしました。帰国後、ネットでグラナダのロルカ記念館を検索したとき、静岡県立大学のロルカ研究者である森直香先生を知り、今回この原稿を執筆する機会をいただく“出会い”にもなりました。

演劇活動としては2020年秋、友人に翻訳を依頼し、コロンビアのノーベル賞作家ガルシア・マルケスの『世界でいちばん美しい水死人』を上演しました。この舞台はコロナ禍の時代を投影し、“共同体の希望”をエンディングで美しく描いた作品になりました。そして2021年11月には、アルゼンチン出身ですがパリで活躍し、日本にはまだ未紹介の劇作家コピの「フリゴ、もしくは…冷蔵庫」（訳 西村和泉）という“シュールで哀しい”不条理劇を名古屋芸術大学で本邦初演し好評を博しました。この作品は今年、名古屋で再演予定です。また来年以降フランスの「アヴィニオンフェスティバル・フリンジ」にもエントリーを計画しています。

ピカソは80歳になって、「アウン・アプレンド！」（まだ学ぶぞ）と言ったそうです。それになぞって言えば、「グラナダでロルカを上演するぞ！」そして、「ガウディのサグラダ・ファミリアが完成したら、またバルセロナ

に行くぞ！」これが“私の”『人生は夢』(17世紀スペインバロックの劇作家カルデロン・デ・ラ・バルカの戯曲) かもしれません。

(ふかさわ・のぶとも 演出家・大学講師)

おもな演出作品・演劇活動(本文との重複部分を除く)

1980年 M・ド・ゲルドロード『エル・エスコリアル』(演出・翻訳)

1992年 ガルシア・ロルカ『ドン・ベルリンプリンがお庭でベリーサを愛する話』

2011年 ガルシア・マルケス『レクイエム・幻のエレンディラ』(翻訳・加藤登)

2014年 マヌエル・プイグ『蜘蛛女のキス』

2017年 ハロルド・ピンター『別の場所、もしくは…景気づけに一杯』

2018年 アリエル・ドルフマン『死とおとめ、もしくは…もうひとつの9.11』(演出・翻訳)

2019年 ハロルド・ピンター『家族の声、もしくは…』(翻訳・西村和泉)

2020年 ガルシア・マルケス『世界でいちばん美しい水死人』(翻訳・丹羽路人)

2021年 コピ『フリゴ、もしくは…冷蔵庫』(翻訳・西村和泉)

公益財団法人・愛銀教育文化財団より長年の演劇活動が認められ、令和3年度(第32回)助成金を交付される。

劇団クセック ACT のウェブページはこちら



フランスに留学したのは1983年10月から1986年9月までの3年間ですから、今から40年も前の話になります。フランス政府から博士課程の奨学金をもらって、3年間滞在する予定でフランスに行き、パリ市南端にある国際大学都市の日本館に入りました。日本館の滞在者は大部分が日本人ですから、日本語環境でフランス生活を始めたわけですが、やはり異国での生活に適応するには時間がかかりました。

フランスではバスや電車は二人ずつ向かい合わせの四人がけの席になっていますが、どんなに混んでいても、絶対に体が触れないように隣の乗客との間に必ず間隔をあけて座ります。また、アパートマンに人を訪ねて行っても、どの部屋にも表札など出しておらず、どこに誰が住んでいるのかわかりません。個人の独立性がしっかりと確保されているのです。日本とは異なるこの個人間の距離に慣れるには、それなりの時間が必要でした。同じ時期に留学していた日本人に精神分析医がいましたが、ある時彼にジーパンを買った話をしたところ、外国に滞在していて衣服を買うのは、その国に住む心構えができたことを意味するといわれました。

初めはフランス語教授法とフランス文学の二系列の履修をしなければならず、かなり忙しい思いをしましたが、そのうち余裕が出てきたので面白そうな授業にもぐり込んでみました。当時はドゥルーズ、フーコー、デリダというフランス現代思想の花形が健在でした（残念ながらフーコーは84年に亡くなりましたが）ので、一番関心があったドゥルーズの授業を覗いてみました。ドゥルーズが教室に入って来て最初にするのは、学生が教卓の上に置いた無数の小型テープレコーダーをかき分けて、講義ノートを置くスペースを確保することでした。恐らくはこの時のテープが、現在ウェブ上で公開されているドゥルーズ講義録の元になっているのでしょう。

ドゥルーズの授業では、1968年のいわゆる「5月革命」の余波が感じられました。学生が起こしたこの体制批判の運動は大学教育の硬直化への抗議がその発端でした。そのため、学生の中には教員に「タメロ」で話す者もいたし、運動に賛同した教員の中にも「タメロ」で話すよう学生に求める人がいました。そして、ドゥルーズの授業にも「タメロ」で質問をする学生がいたのです。聞いていてハラハラしましたが、ドゥルーズはその学

生には「タメ口」で答え、丁寧語で質問する学生には丁寧語で答えていました。ドゥルーズ自身は5月革命を評価しており、権威主義とはまったく無縁の人で、気さくに話しかけるような調子で講義をしていました。

ドゥルーズは当時映画の問題に取り組んでおり、この時の講義はのちに『シネマ』というタイトルで出版されることとなります。ある日の講義では、一本の線分をふたつに分割した場合、切り口は前の線分の最後になるのか、後ろの線分の最初になるのかを考察していました。映画で二つのシーケンスを繋いだ時、繋ぎ目をどのように考えるかという問題です。「ここまでの話は、ついてこられたかね」と時々学生に問いかけながら、数学的な比喩を交えて話すドゥルーズの授業は、興味の尽きぬものでした。年度の最後の授業で単位が必要な学生に手を上げさせたのですが、50人以上いた受講生のうち、手を挙げたのはほんの数人でした。「それでは、残りの人たちはいったい何なのだろうか」と、ドゥルーズは悪戯っぽくつぶやいていました。

かなり専門的な授業の話になってしまいましたが、これから語学留学をする人のために、初歩的なアドバイスをしておきましょう。外国に行けば自然にその国の言語が喋れるようになるというのは全くの幻想で、どんなに長く外国にいても、必死になって努力をしなければ喋れるようにはなりません。語学修得には「聞き取り」と「発話」の二つの側面があります。まず「聞き取り」ですが、それぞれの言語には特有のリズムとイントネーションがあり、これを身につければ聞き取り能力は飛躍的に向上します。これは頭ではなく体で覚えるものなので、耳から聞こえた音をそのまま口から出すシャドウイングがよい練習になります。その際に、母語話者のリズムとイントネーションをできるだけ「真似する」ことを心がけてください。効果を上げるには、実際に声に出して練習する必要があります。

次に「発話」能力の養成です。会話とは声で行う作文ですから、会話力をつけるには作文の練習をするしかありません。基本的な文をいくつも覚えることから始めましょう。ただし、覚えた文をそのまま使える状況はほとんど現れませんから、覚えた文を変形する能力を養う必要があります。「私は映画に行く→映画に行った→映画に行かない→彼は映画に行く」など、思いつく限りの変形練習をすることで、覚えた文を実際に使えるようになります。フランス留学に向けて、最初の一步を踏み出してください。

(いなだ・はるとし 静岡県立大学名誉教授)

ヨーロッパの街の魅力

上野雄史

ここでは私なりのヨーロッパ感を思いつくまま、書いてみようと思います。ヨーロッパと聞いて何が思い浮かぶかと私は言われると、キーワードとして、『多様性、歴史、文化、個性的』といった言葉が思い浮かびます。特に地方に行くと、それぞれの土地の拘りを感じさせる食べ物や、風習、史跡、文化を目にすることができます。

私はヨーロッパ各地をくまなく回ったわけではないのですが、印象的だった街をいくつか挙げるとスペインのバリャドリッド、イギリス（イングランド）のライ、オックスフォード、ドイツのブレーメン、リュースブルク、イタリアのボローニャ、フォルリ、フランスのディジョンですね。

私の両親は旅行好きで、家族旅行でも何度かヨーロッパは行ったのですが、やっぱり自分でチケットを取って苦労し、色々なハプニングに見舞われたりした街の方がなぜかよく覚えていますね。ちなみに、フランスのディジョンは、家族で行った街ですが、美味しいフランス料理を食べて、その後、ブルゴーニュのブドウ畑に行って、両親（というか父）がケースごとワインを購入して送り、その後、沢山税金を払う羽目になった…ということも良い思い出です（だからよく覚えているのかもしれませんが）。

ヨーロッパの多くの街は、古い歴史があり、それを土台にした文化、風習が形成されています。先ほど挙げた街の中で、知名度が高いのはオックスフォードですね。オックスフォード大学があるこの街は、まさに街と大学が一体となっており、街の中に点在するカレッジがあります。40を超える自治権をもつカレッジが街に点在しています。私たちはすぐに『オックスフォード大学』とひとくくりにしますが、カレッジの連合体で形成されていますので、私たちがイメージする大学とはイメージが違います。街の至るところで大学生をみかけます。オックスフォードにはヨーロッパ以外の多くの国、アフリカ、アジア、米国、南米、オセアニアなど、世界各地から多くの留学生が来ています。オックスフォードに行くと、大学は多様性を尊重しなければならない場所である、ということを実感します。

取り上げた街の中で、一番マイナーで小さな町なのは、ライ（Rye）かもしれません。ライはイングランドの南東部に位置している、人口は5000人未満の本当に小さな町です。ロンドンから列車で2時間弱で行くことができます。ライは世界遺産にも入っていませんし、教会（セント・メアリー

教会)、ライ城(城というよりは物見塔のような建物)がある以外に何もないとはいえないのですが、中世の街並みが残っていて雰囲気がとても落ち着く感じでした。ただし、私はここでスパルタな語学研修で缶詰になっていたのでどちらかと言えば、苦悩の思い出しかありませんが…。毎日の英語のレッスンを終えた後に、カフェで食べた特大スコーンの味は今でも忘れられません(特大に感じただけで普通の大きさだった可能性もあります)。

それぞれの街の個性を書くと紙面が足りないのですが、こうして書いてみて気づかされるのはヨーロッパの多くの街が大聖堂・教会などの宗教施設を中心に形成されていることです。

日本で言えば、城を中心に街が形成されている、に近いものがあるかもしれません。日本で言えば、香川県丸亀市、滋賀県彦根市がそうですね。静岡も浜松市、掛川市、静岡市などもそうですね。城を中心として人が集まり城下町を形成したことが今の街並みにも影響しています。東京も皇居のある江戸城を中心に形成されてきていることを考えると日本の街の中心は「城」である、と感じますね。ちなみに江戸幕府を開祖した徳川家康は、関東に移封されることが決まった際に、秀吉から小田原や鎌倉を本拠地にしてはどうかと勧められたと言われますが、関東平野の真ん中に位置して海、川に面している江戸が最適である、と判断したそうです。時の為政者が城を作り、そこを中心に人を集め、街が出来る。それが日本の街造りの特徴と感じます。

それに対して、為政者の力で街が作られていくというよりは、大聖堂・教会を中心に街が作られていくのがヨーロッパなのかもしれません。つまり、為政者よりも宗教の方がより強い力を持っていたといえるでしょう。ちなみに日本でも寺院を中心に街が形成されているケースもあります。門前町として有名なのは太宰府、琴平、身延、善光寺などでしょうか。素人見解ですが、もし本願寺などの宗教勢力がもっと政治的な力を持って、各街を支配する、もしくは影響力に強い及ぼすようになっていけば、ひょっとすると、門前町の数も今よりも多かったのかも…などと想像しました。

取り留めもなく書いてしまいましたが、こうして訪れたヨーロッパの街を思い出し、日本の街並みと比較すると、今の地方創生に何が必要なのか、という事も思い浮かんで来る気がしませんか? ただ、私は難しいことを考えるよりも、その街を訪れて「雰囲気を楽しむ」ことが大好きですけれども。

(うえの・たけふみ 静岡県立大学経営情報学部教授)

私は大学の外国語学部でスペイン語を専攻しましたが、初めて触れる言語に戸惑いの連続でした。文法の授業は進度が早く、1年生前期ですべての事項の説明が終わり、わけがわからない状態で最初の定期テストに臨みました。スペイン出身の教員たちの抑揚のないイントネーションが怒っているように聞こえたので、授業中はとりあえず気配を消し、教員とは目を合わさないようにしていました。それでも、単位を落としたい一心で、予習だけは続けて、なんとかに授業についていきました。時間が足りず、通学電車の中でも辞書を引きました。講読科目以外でもスペイン語の資料を使う機会が多かったのですが、もともと言語を問わず読むことが好きだったので、これは苦になりませんでした。長期休暇にはスペイン文学関連の原書に挑戦するようになっていました。優等生ではありませんでしたが、訳読の勉強だけは頑張った学部時代でした。

卒業後、スペインへ1年間留学しました。到着直後は、現地のスペイン語のイントネーションが学部時代の教員以上に平坦できつく響き、さらに数倍のスピードであることに驚きました。しかし、たくさんスペイン語を読んでいたおかげで語彙力が身につけており、最初からだいたい理解はできました。一方で、会話の授業をさぼっていたついで、なかなか言いたいことが言えず歯がゆい思いをしました。まず1か月間、語学学校へ通ったのですが、申込の際、受付の女性が言うことは理解できているのに受け答えができず、「彼女はスペイン語が全然分かっていないね」と言われてしまい、悔しかったことを覚えています。

この時期は、新しく覚えた語彙を正しい文章で産出することを意識して過ごしました。常にメモを持ち歩いて気になるフレーズを書き取り、それをどう使ったらいいのかイメージトレーニングをしました。正しいアウトプットに文法知識は不可欠なので、文法を徹底的に復習しました。

こうして1か月後には、生活に不自由しないレベルに達していました。語学力に自信がついたところでマドリード・コンプルテンセ大学文献学部のスペイン学研究コースに移りましたが、今度はスペイン式の授業に慣れるのに苦労しました。コースは外国人を対象に歴史、文学、地理、美術、言語学などスペイン学の基礎を教授するというもので、ガイダンスでは「会

話は街に出て自分で学びましょう」と釘を刺されました。当時のスペインの大学の一般的な授業スタイルは、教員が板書もせずひたすら喋るのを、学生が一字漏らさずノートに書きとるというものでした。ヨーロッパ諸国の学生は比較的授業についていけているようでしたが、その他の学生はかなり困惑していました。最初は 50 人以上いた受講生がコースの終わりには半分になりました。

授業では必死でノートを取り、帰宅後は辞書と関連文献を片手に講義内容を類推し、ノートを再構成しました。授業中ずっとノートをとるのは疲れるので、質問をして教員の話が少しでも進まないようにしました。当然、その内容は授業に関連してはならず、そのために参考文献を読みこみ質問を考えました。そうするうちに、だんだん授業が楽に受けられるようになりました。その3年後、スペインの大学の博士課程に入りましたが、スペイン語で博士論文が書けたのはこの経験がベースにあったからかもしれません。

思い返すと、私のスペイン語学習の中心は辞書を片手に読むことで、本好きだったから続けられました。語学習得にはまず継続が必要なので、得意なことにたくさん取り組んだのがよかったのかもしれませんが、それだけでは不十分で、苦手なことも避けては通れません。私の場合は、留学をきっかけに苦手な文法や会話を克服できました。自惚れを恐れず言えば、今では「授業中の文法説明がわかりやすい」とお褒めをいただくこともあります。文法に苦勞したおかげかもしれません。

(もり・なおか 静岡県立大学国際関係学部准教授)

留学を目指す人におすすめの文献

新井リオ『英語日記 BOY』左右社、2020 年。

中丸 明『スペインうたたね旅行』、文春文庫、2002 年。

インスティトゥト・セルバンテス東京（スペイン語圏諸国の文化を広めるための公的機関）のウェブページはこちら



ヨーロッパ留学体験記

小谷民菜

私が初めてドイツに長期滞在したのは四半世紀も前、1995年7月～9月のことです。ゲーテ・インスティテュートという語学学校で8週間学び、2か所の研究所で約1か月文献調査を行いました。

ドイツ語を何年も学び、ドイツ文学を研究し、非常勤講師として既に学生たちにドイツ語を教えた経験がありながら、ドイツで暮らしたというのは実質的に今回が初めてで、正直に言って少し不安がありました。ゲーテ・インスティテュートへ入学してすぐわかったのですが、文法能力ばかり高く、実践的なドイツ語運用能力に問題があったわけです。

ですが、3か月間で運用能力は飛躍的に向上しました。勿論すぐれた語学学校で集中的にドイツ語を学んだということは大きいと思いますが、外国での生活に慣れたことも大いに関係しています。交通機関の利用一つをとっても、パスがあれば、大抵どこへでもそのまま行けて、コミュニケーションの問題はなくなってきました。

最初はミュンヘンにいたのですが、午前中に授業が終わると、旧市街を散策し、暑くなってくると、教会に入って休んでいました。ハイネが「ミュンヘンは坊主の町」と言っているくらい教会が多く、また博物館も多いので驚きでした。また、スマホがない時代でしたが、情報誌はあり、ミュンヘンの美術展・音楽会・映画・演劇などの文化情報を調べ、自分の好きなコンサートやオペラに頻繁に足を運びました。とにかく公演数が多く、水準が高く、チケットが安いので、夢のようでした。世界的なテノール歌手を生で聞くことができたり、オペラ『魔弾の射手』の「狼谷」の場面に戦慄を覚えたり、という得難い経験の後、帰宅は遅い時間となり、不審者に襲われないよう、道の真ん中を走って帰ったものです。

基本的に自炊生活でした。スーパーマーケットでは、好物の乳製品や缶詰、ジュースの種類が特に豊富という印象で、全般に食品が日本と比べて安価で助かりました。

最後に滞在したのが、マールバッハにあるドイツ文学文書館です。ここでは他の研究所や大学では見つからない文献を入手することができます。長期滞在の研究者用の宿舎があり、そこで暮らしていました。昼間の文献

調査の後、夜は度々、共同の談話スペースで各国の研究者と意見を交わしたものです。ドイツ語で、アメリカや韓国その他の国々の出身者と話ができるというのは素晴らしいと本当に実感しました。

スイスのチューリヒにも足を運びました。国境で列車の車内に検査官が来て、緊張したのを覚えています。たまたま大学院時代の知人がそこに暮らしていて、泊めてもらい、ヴィンタートゥーアの美術館を訪ねた次第です。海外で日本人と会うと、誰でもそうかと思いますが、貴重な情報交換ができると同時に励ましが得られます。

外国へ行くと、本当に重要なことと、些末なことの区別ができるようになります。これはいくら情報があっても、日本にいてはわからないことです。ドイツは、ヨーロッパの中でも安全で、豊かで、合理的な国です。いつか是非ドイツで学んでみてください。

(こたに・たみな 静岡県立大学国際関係学部准教授)

留学を目指す人におすすめの文献

初宿正典『新版 暇つぶしは独語で ドイツ留学体験記ほか』、成文堂、2010年。

ゲーテ・インスティテュート東京（外国人にドイツ語教育を推進し、文化交流・文化協力をするための公的機関）のウェブページはこちら



留学生の住宅事情

浅間哲平

留学して現地に滞在するには、「住む」という行為が欠かせません。私は、ジュネーヴとパリの大学で学びましたが、留学生の住宅事情について簡単にお話したいと思います。

ヨーロッパの大学には付属の寮がついていて、シテ・ユニヴェルシテール *Cité universitaire* と呼ばれています。ジュネーヴのシテは古いスタイルが残っており、フロアーごとにキッチン、シャワー、冷蔵庫があって、いずれも共用でした。シャワーは男女兼用で、初日にタオル一枚で体を覆う女性に度肝を抜かれました。キッチンも広いわけではなく、コンロは3台ほどだったでしょうか。混み合う時間には奪い合いでした。共同の冷蔵庫から私のヨーグルトがなくなることもありました。しかし、思い返すと、シテの2階で1年を共にした仲間たち（ケベックなまりで何を言っているか不明なカナダ人、事情で外国人ばかりの寮に住んでいたスイス人、キッチンで必ず声をかけてくれるコートジボワール人、大勢の友人と「留学」しにきたルーマニア人）のことは忘れられません。

パリでは大学寮にも住みましたが、そこを出てからの一人暮らしで苦勞しました。留学生とはつまり外国人でもあって、大家と賃貸契約を結ぶのはたいへんなものです。帰国する日本人学生が借りていた部屋を引き継いで、なんとか住処を得ました。パリ14区ダゲール通りという有名な市場の近くで、場所はとても気に入りましたが、地上階の部屋でした（フランス語には地上階 *rez-de-chaussée* という言葉があって、文字通り「舗道と同じ階」という意味です。1階 *première étage* と言えば日本式の2階を指します）。ここは、とにかく寒かった。暖炉のある広いリビングと寝室、さらにキッチンがセパレートでつくという豪華な造りでしたが、夏でも暖房が必要なぐらいでした。

早く引っ越したいと、借りることのできる部屋を探さざるを得ませんでした。不動産屋に行ったり、パリ郊外の一軒家でシェアハウス（フランス語ではコロカシオン *collocation*）をしている人を紹介してもらい見学したりしました。楽しそうでしたが、そのころは博士論文を執筆しようとした時期で、共同リビングで週一回は開くというパーティー *fête* に恐れをなし

て、辞退しました。

さんざん探し回って落ち着いたのが、パリ 16 区のオートウイユという高級住宅街でした。しかし、優雅に暮らしていたわけではありません。フランスの古いアパルトマンでしばしば見かける最上階の小さな個室でした（多くは屋根が傾いていて、そこに天窗がついている）。これを人は女中部屋 *chambre de bonne* と呼びます。昔、階下に住んでいたブルジョワが働く女中たちを住ませるためにこしらえた部屋が現存しているのです。実際、隣にはフィリピンからきたという女性二人が住んでいて下の階の住人の世話をしているとのことでした。この部屋は、目の前に競馬場が広がっていて、その向こうにはブローニュの森、そしてサン・クルー公園が見渡せる素晴らしい展望をそなえていましたが、とにかく暑かった。屋根裏のない最上階なので日が照りつけると夜になっても室温は下がりません。私は、この部屋で暑さと闘いながら、論文を執筆することになります。

振り返ってみると、大学寮、コロカシオン、地上階、女中部屋というように留学生の居住形態を一通り経験してきたのだと気づかされます。フランス語にはボエーム *bohème* という言葉がありますが、貧しく自由に暮らす学生というのを地で行っていたと思います。苦労話のように聞こえるかもしれませんが、どれも私にとっては楽しい思い出になっています。

（あさま・てっぺい 静岡県立大学国際関係学部講師）

留学を目指す人におすすめの文献

阿部良雄『若いヨーロッパ：パリ留学記』、河出書房新社、1962 年。

遠藤周作『留学』、新潮文庫、1968 年。

須賀敦子『コルシカ書店の仲間たち』（『須賀敦子全集第一巻所収』）、河出書房新社、2000 年。

石井好子『巴里の空の下オムレツのにおいは流れる』、河出文庫、2011 年。

キャンパスフランス（留学生や研究者のフランスでの受入れを支援する公的機関）のウェブページはこちら



II. 静岡からヨーロッパを発見する

第 II 部は 2021 年度に静岡県立大学国際関係学部教員有志により企画・開催された公開講座『県大×おまちゼミ・ヨーロッパ旅行予習編』をベースとしています。講座開催の背景には新型コロナウイルス感染症の拡大がありました。海外渡航が困難となり国際関係学や外国語学習のモチベーションを保つのに苦勞している学生たちに向けて、静岡にいながらにしてヨーロッパ文化を感じてもらい、新しい学びの形を提案したいと考えました。講座の詳細は以下です。

- 第 1 回「ヨーロッパと Manga」静岡市国際交流員・フォスティン・ボドゥ氏、ファイファー・マティアス、森直香、於静岡県立大学、2021 年 5 月 12 日。
- 第 2 回「お菓子とワインで知るフランス文化」フランス人美食ジャーナリスト・マルティノ・ロベル＝ジル氏、小窪千早、Zoom 開催、2021 年 6 月 26 日。
- 第 3 回「歩きながら古いパリを発見する」「著作権や印税などについてーバルザック、フロベール、そして三島由紀夫」東京大学名誉教授・放送大学客員教授・宮下志朗氏、於静岡県立大学、2021 年 7 月 21 日。
- 第 4 回「演劇でヨーロッパと日本をつなぐ」SPAC（静岡県舞台芸術センター）俳優・永井健二氏、京都大学大学院准教授・中筋朋氏、Zoom 開催、2021 年 10 月 30 日。
- 第 5 回「フランス海外県への誘い」フランス語講師・メレザン・シリル氏、於静岡県立大学、2021 年 11 月 22 日。
- 第 6 回「印象を探る」静岡市美術館学芸員・深尾茅奈美氏、浅間哲平、於静岡市立美術館、2021 年 12 月 18 日。展覧会「ランス美術館コレクション 風景画のはじまり コローから印象派へ」（2021 年 11 月 20 日～2022 年 1 月 23 日、於静岡市美術館）との連動企画。
- 第 7 回「近代化の出発点静岡—1867 年パリ万博とのつながり」宮崎晋生、小窪千早、浅間哲平、於 B-nest、2022 年 1 月 8 日。

第 II 部では、エッセイを通じて従来とは異なった国際関係学のあり方を

提案します。国際関係学とは、世界の国や地域同士の関係を歴史学、社会学、政治学、法学、文学、地域研究などさまざまな学術的視点から読み解く学問ですが、ここではは伝統的な手法とは少し異なる視点でヨーロッパ文化をとらえます。

永井健二「演劇を通じて知るヨーロッパ、その先に見えるもの」、中筋朋「舞台の『アトリエ』というヨーロッパ体験」、深尾茅奈美「企画展『風景画のはじまり コローから印象派へ』を巡って」、フォスティン・ボドゥ「世界と日本を繋ぐ Manga」（インタビュー）、森直香「スペインにおける日本文学」、宮崎晋生「パリ万博使節団の足跡と静岡―渋沢栄一の見聞」では、比較を通じた文化理解について扱っています。比較文化と言ってもその手法はさまざまで、複数の文化の共通点や相違点を分析することも可能ですし、ある文化や文明が他の文化や文明にどのように受容され変異していったかを考察することもできます。本冊子では扱いませんが、ジェンダーやディアスポラなどの現代社会の在り方を象徴するキーワードで文化を読み解くことも可能です。宮下志朗「古いパリを歩くこと、発見すること」では、文献調査や発掘調査でもなく日常空間に歴史の痕跡を発見する、古地図に描かれた人々の日常生活を見出す、映画に登場する街に注目するなど、さまざまな手法でのヨーロッパ研究が可能であることを示唆しています。そして、シジル・メレザン「フランス海外県への誘い」は、国という単位でヨーロッパの文化をとらえるのではなく、同じ言語を使用する地域という広い範囲で考えることで、文化の多様性と同質性をより理解することができることを伝えています。

以上のように、国際関係学と言っても、さまざまなアプローチが可能です。これらの多彩なエッセイが、みなさんにそれぞれの国際関係学との向き合い方を見つけるヒントとなることを願っています。

编者（森）

『県大×おまちゼミ』のウェブページはこちら



演劇を通じて知るヨーロッパ、その先に見えるもの

永井健二

静岡県舞台芸術センター（以下、SPAC）で演劇活動を始めて22年。これまで、ヨーロッパ圏では、ロシア（2001/2002/2003/2005）、フランス（2003/2017/2018）、イタリア（2003）、トルコ（2006）、スイス（2017）での公演を経験しました。と言っても、海外公演の場合、一週間程度の短期滞在が多く、その国を充分知るに及ばないことがほとんどです。ただ、ロシアのモスクワは複数回訪れていることもあり、多少は勝手知ったる感じ。そして、2017年のスイス・ローザンヌと2018年のフランス・パリは、それぞれ公演期間が1ヶ月のロングランだったため40日以上滞りとなり、「現地で生活した」気分です。もちろん、基本的には劇場とホテルの往復の日々で、一日の大半は劇場内で過ごすわけですが、現地の劇場スタッフや観客と触れ合う機会も多く、観光で訪れる以上に現地の文化や価値観に接する機会を得ました。「仕事に取り組む姿勢」「観劇中の観客の反応」など、具体例は割愛しますが、非常に多くの発見と驚きがありました。そしてそれは、翻って言えば、彼らとの触れ合いを通じ、日本人としての自分のアイデンティティや日本文化を見つめ直す機会でもありました。

特に、「生活における演劇の位置づけ」「劇場という場の持つ役割」などは、日本のそれと大きく異なるため、滞在することで初めて気づいたことでした。パリやモスクワは演劇がとても身近で、日本人が映画を見に行くような感覚で観劇に出かけます。劇場は「たまにオシャレして出かける場所」ではなく、「日常的に気軽に行く場所」なのです。公演情報も入手しやすく、チケット料金も多種多様な設定。そもそも、公立劇場の数が日本と比較にならないほどたくさんある上、劇場が地域のコミュニティ拠点として存在している時点で、生活への密着具合が分かります。それだけ身近なものなので、「劇場スタッフ」「舞台俳優」というものが一般的な職業として確立されています。これは中国などでもそうですが、舞台俳優になるためのプロセスも明確で、教師が教員免許を取得するように、専門の勉強をしていないと舞台俳優になれません。裏を返せば、それだけステイタスのある職業ということになります。この点、日本では、歌舞伎俳優などの伝統芸能は別ですが、誰でもがいつでも俳優になれてしまう半面、プロとし

て生計を立てられる保証は少なく、「演劇の世界で食べていくことは難しい」ということになります。将来の職業を考える時、「劇場で働く」「舞台俳優になる」という選択肢が、日本ではヨーロッパほど一般的ではなく、日本での演劇の地位はまだ低いと言わざるを得ません。

また、演劇は「言語の芸術」でもあります。バレエやオペラなら、どの国でもほぼ共通です。スポーツも、ルールさえ同じなら、どの国の人とでもできます。しかし演劇は、「言語が異なる」ことが大きなハードルになります。例えば、話せない言語でセリフを喋ることはできないし、初対面の異言語の人といきなり共演することも至難の業です。その言語だからこそ伝わるシャレや言い回し、その言語特有のリズム感など、「言語が変わると損なわれてしまうもの」もあります。もし共演者に母語が日本語でない俳優がいれば、「お互いに異なる言語で会話する」みたいな状態にもなるわけです。こういったハードルを「どう乗り越えるか」「どう受け入れるか」というのが、演劇の面白いところでもあるのですが、そのぶん苦労も大きいところ。こうなると、翻訳者や通訳者の存在がとても重要になってきます。

そして、SPACが海外公演をおこなう際は、日本語で演じ、現地の言語の字幕を出します。観客は、字幕付きの外国映画を見るような感覚です。映画なら、演技と字幕が一つの画面に収まっていますが、「舞台上の俳優の身体も見つつ、舞台のどこかに出される字幕を見て内容を読みとる」というのは、慣れていてもなかなか難しい作業です。日本人は比較的、字幕を読むことに慣れており、マンガ文化の普及のおかげか、「絵と文字の両方を、同時に認識して処理する」能力にも長けているように思います。しかし、例えば「フランス人は字幕を読むことに慣れていない」と耳にしますし、実際にフランスで公演した時も、「字幕はあまり目で追わず、俳優をメインで見る」という観客が多かった印象です。そう考えると、「物語の内容」よりも、「演出やビジュアルや身体表現など」で勝負する作品のほうが、受け入れられやすいのかもしれない。あと、演劇が浸透しているヨーロッパでは、名の知れた劇作家の作品は一般教養として広く知られていたりするので、そういう作品を、あらすじを知っている前提で観劇してもらうこともできます。

このように「異なる価値観を知ること」、それはつまり、自分たちをより深く知ることに繋がります。「日本人であることを意識し、その先に新しい

自分の姿を見る」、そんな感覚かもしれません。

(ながい・けんじ 俳優)

静岡舞台芸術センター（SPAC）のウェブページはこちら



永井先生の『県大×おまちゼミ』のビデオはこちら



舞台の「アトリエ」というヨーロッパ体験

中筋 朋

県大×おまちゼミでは俳優の永井健二さんの聞き役として、また私個人の舞台を通じたヨーロッパとの関わりについてお話することで関わらせてもらいました。私は職業としては大学教員、19世紀のフランス演劇が専門ですが、もともとは現代演劇についての研究もしていました。そして19世紀という時代に興味をもったのも、実はこの時期が、フランス演劇において身体表現が重要になるターニングポイントだからです。演劇研究をするときに、現場と関わりをもつかどうかは人それぞれですが、身体表現については体験しないとわからないことも多くあります。また、音声や映像の記録がない19世紀だからこそ現場を知っていることが理解の助けになることもあります。もちろん、そのときに現代の常識が先入見にならないように気をつけないといけません。2021年の県大×おまちゼミでは、「ヨーロッパ体験」がひとつの大きなキーワードですが、「体験」によって得られるものは、やはり「見聞」とは質がちがうようです。それはちょうど、語学を学ぶときに、文法のルールを理解することと、それをを用いて実際に会話することが別物なのと同じなのかもしれません。

ともあれ、私個人にとっては、舞台の現場との関わりと研究は切っても切り離せない関係にあります。というより、自分の不器用な身体とのつきあい方を考えるために、さまざまな演劇やコンテンポラリーダンスのワークショップに参加していたことが現在につながったという方がよいのかもしれません。このようなワークショップが、私にとっては「ヨーロッパ」をはじめ近く感じる体験になりました。「ワークショップ」は、フランス語では「アトリエ」といいます。日本人の感覚としてはもしかしたらこちらがわかりやすいかもしれません。「アトリエ」だと絵画や彫刻が連想されますが、舞台芸術の場合もいろいろな実験をしながらあらたな作品を生み出す準備期間となる場をこう呼びます。なにかを教わる「クラス」というよりも実験工房のイメージでしょうか。「1日工房体験」のような短いワークショップも楽しいものですが、長期間にわたるワークショップもやはり魅力あるものです。

大学生のころには夏に1ヶ月にわたって毎日おこなわれるワークショッ

プで、ギリシアやフランス、ドイツのダンサーさんたちを工房の「主」として、日本にいながらのヨーロッパ体験をよくしていました。さまざまな言語が飛び交い、たとえばフランス人ダンサーがお昼ごはんの木の実をマットに並べて食しておられるなどの習慣の違い—これは、いま思えば国による違いでもない気がしますが—に驚きながら、しかし日々身体の動きを共有することによって遠かったものが次第にからだに沁みこんでくるようなこのひと月は、ヨーロッパと芸術創造の場という、そのときの私にとってふたつの異世界を体験した時期で、研究の原風景となっています。

静岡では、SPAC（静岡舞台芸術センター）が、短いワークショップだけでなく、このような長いワークショップや舞台づくりへの参加を体験する機会をよく提供しています。コロナの影響で「ふじのくに」でのリアル開催から「くものうえ」のオンライン開催になっていた SPAC の演劇祭も、2022 年の今年にはふたたび海外劇団の参加も予定されているので、だんだんこうしたワークショップの機会も復活してくることを期待しています。SPAC は非常におもしろい場所で、山ひとつが劇場かつ創作をする空間のようになっています。アーティストが制作や公演の機会に滞在するのでもここで、演劇祭のときにいくつもの演目をはしごするときには、富士山をみながら茶畑を移動し、それぞれ特徴のある劇場建築も堪能しながら観劇することができます。

こうしたワークショップへの参加を重ねるうちに、なんとなくのお手伝いとして、あるいは学生時代には、他の参加者のみなさんの許可をとって、参加させてもらう代わりに通訳をつとめるなど、通訳をする機会がふえてきました。動きや呼吸の「質」という、意識したことがないとわかりにくいものを訳すには、語学だけでなくそれこそ「体験」がないとむずかしいため、フランス語だけでなく、語学力としては不安定な英語の通訳をすることもありました。その延長線上に、ゼミでもお話した日仏共同制作の舞台『ことばのはじまり』がありました。これはフランス人演出家ディディエ・ガラスと日本人のダンサー、俳優、音楽家でもにつくった舞台です。出演者は、1 週間にわたる 30 人の大所帯での「ワークショップ」を経て決定し、そのメンバーとさらに 1 ヶ月以上毎日稽古をしながら作品をつくりました。脚本はなく、毎日「ワークショップ」をして、夜ディディエと私が話をしながら作品がだんだんと姿を見せてきました。初演を迎えたとき、毎日全員で 2 時間ヨガをしていたことが—そのどれも、直接舞台で見せる

動きではありませんでしたが一実は水面下で働いていたことに気づきました。これは「体験」というものが、知らないうちに身になっているものだという事をまのあたりにした瞬間だったのかもしれませんが。外国語を身につけるときの同じ感覚がありますが、「身につけている」ことを自分でも知らないままなにかが蓄積していくこと—そのゆたかさが楽しく年を重ねることに結びついている気がします。

(なかすじ・とも 京都大学大学院人間・環境学研究科准教授)

中筋先生の『県大×おまちゼミ』のビデオはこちら



企画展「風景画のはじまり コローから印象派へ」を巡って

深尾茅奈美

豊かな自然環境に恵まれた風光明媚な土地、静岡。駿河湾や三保の松原、富士山は古くから画家たちの靈感源となり、狩野山雪の《富士三保松原図屏風》や葛飾北斎の《富嶽三十六景》を筆頭に数々の名品が生み出されました。多くの風景主題を提供してきた静岡の地で、風景画の展覧会を開催することができたのは、不思議な巡り合わせと言えるかもしれません。

静岡市美術館では2021年11月20日から翌1月23日まで企画展「ランス美術館コレクション 風景画のはじまり コローから印象派へ」を開催しました。フランス北東部のシャンパーニュ地方に位置するランス美術館。その所蔵品を中心に据えた本展では、フランス風景画の黄金期にあたる19世紀に光を当て、アシル＝エトナ・ミシャロン、カミーユ・コロー、ウジェーヌ・ブーダン、クロード・モネらの名品70点余りによって、新古典主義から印象派に至る風景画史の変遷を紹介しました。

日本では古来、自然風景に取材した山水画が主要な絵画ジャンルとみなされてきましたが、フランスで風景画の重要性が認められるようになるのは近代に入ってからのことです。官立の芸術機関であったフランス・アカデミーでは長い間、神話画や宗教画と比べて風景画が劣るものと考えられていました。しかしフランス革命を経て、絵画の購入層が王族や貴族のみならず、財力を蓄えた中産階級にまで広がり、知識や教養を必要としない風景画の需要が高まりをみせます。19世紀初頭にはアカデミーでも優れた風景画家を選出する褒賞制度を創設、風景画制作のための実践書も刊行されました。

自然風景に魅了された画家たちは、想像力に依拠したアトリエでの絵画制作には飽き足らず、自ら田舎に足を運び、野外での制作を好むようになります。19世紀初頭には、フランス・アカデミーのローマ分館であるヴィッラ・メディチが野外制作のメッカとなり、ミシャロンをはじめとする新古典主義の画家たちがこの地で野外スケッチの制作に励みました。その後ほどなくして鉄道網の発達やチューブ式絵の具の開発により、フランス国内でも野外制作が広く浸透します。

本展最大の見どころ画家であるコローが活躍するのもこの時期です。ラ

ンス美術館はフランス国内でルーヴル美術館に次ぐ規模と言われる 27 点の कोरो 作品を所蔵しており、同館のリニューアル休館中に実現した今回の展覧会では、そのうちの 16 点をまとめて展示しました。アカデミーの新古典主義画家たちに師事した कोरो は、伝統的な絵画技法の後継者と、印象派の先駆者という二つの顔を持つ人物です。彼は旅先で目にした風景を戸外でスケッチに収め、アトリエで自らの記憶をもとに诗情あふれる牧歌的な世界像を描き出しました。

田舎の日常風景を描いたバルビゾン派、海景画家として名声を得たブーダンを経て、19 世紀後半に登場する印象派によって風景画にさらなる革命がもたらされます。準備習作の際に戸外制作を行った前世代の人々とは対照的に、印象派の画家たちは完成作でもこの制作法を取り入れ、早描きの作品を展覧会に出品しました。なかでもモネは自身の見え方を忠実に再現することに固執し、色に関する一切の固定観念を捨象しました。その結果、彼の描く風景画は固有色を離れた鮮やかな色調で彩られています。1880 年代からは異なる光や天候の条件下で一つの風景の見え方がどのように変わるかを確かめるべく、モネは複数のカンヴァスで同じ光景を取り上げるようになり、1890 年代の連作制作に結実しました。

以上に見たフランス風景画の流れは、「保守」対「前衛」という二項対立で単純化されてきた美術史観を一新する可能性を孕むものです。従来、「前衛」の象徴とされてきた印象派は、アトリエでの制作を絶対視するアカデミーの伝統に対抗して戸外制作に励んだものと考えられていました。しかしここ数十年で、実はアカデミーの画家たちが戸外で油彩スケッチ制作を行っていたことや、印象派の画家たちが時にはアトリエで作品の仕上げを行っていたことが明らかにされ、両画派の親縁性も認められつつあります（*）。新古典主義から印象派に至る風景画の系譜を取り上げた本展は、そうした昨今の研究動向の延長上に位置づけられるものと言えるでしょう。

（*）とくに新古典主義画家たちの風景画制作を巡っては、近年多くの研究が蓄積されており、主な研究・展覧会として以下が挙げられる。Albert Boime, *The Academy and French Painting in the Nineteenth Century*, New Haven, 1986; Exh. Cat. *Paysage d'Italie : Les peintres du plein air 1780-1830*, Galeries nationales du Grand Palais, Paris et al., 2001; 小針由紀隆『ローマが風景になったとき—西欧近代風景画の誕生』春秋社、2010 年。

（ふかお・ちなみ 静岡市美術館学芸員）

世界と日本を繋ぐ Manga

フォスティン・ボドゥ

インタビュアー・文 静岡県立大学国際関係学部学生
鈴木 葵・竹下百香

世界で日本の漫画やアニメがどのように受け入れられているのだろうか。フランスは日本に次ぐ第2位の Manga 消費国であり、その人気は絶大だ。現在静岡市役所の国際交流員を勤めるフランス人、ボドゥさんも日本の Manga に魅了される一人である。彼女にフランスにおける Manga の受容、ご自身と Manga の関係についてインタビューを行った。

フランスにおけるマンガ・アニメ

まず、フランスでは、どんなマンガやアニメが人気なのかをお聞きした。

日本でウケるマンガやアニメはフランスでもウケる。『ワンピース』や『鬼滅の刃』『呪術廻戦』など。クラシックな作品、『NARUTO』『ドラゴンボール』などが子供向けに再放送されており、新しい世代も古い作品に興味を持ったり。

彼女の口からは、現在のヒット作品だけでなく、古典的名作も挙がった。

しかし、以前はアニメに様々な制限や批判もあったという。日本国外での放送にあたって、ふさわしくないとされる描写を子供向けにソフトなものに差し替えることもあった。たとえば、登場人物が飲むワインがジュースに変わっていたり、流血の描写をなくしたり、頭に突き付けた銃口が人差し指になっていたといった具合である。『ワンピース』の登場人物がくわえるタバコは飴に差し替えられていた。この点についてもボドゥさんに伺った。

今はそういうことは、もうほとんどないんじゃないかな。今は、サンジはちゃんとタバコを吸ってます（笑）

この理由は大きく2つあるという。1つ目は、漫画やアニメは子供だけでな

く大人も楽しめるという考えが浸透しつつあることである。そのため、子どもだけに向けた描写である必要がなくなった。2つ目はインターネット上に、無修正の日本アニメにフランス語字幕をつけたものが視聴できる専門サイトができたことである。これにより、作者の意図がそのまま反映されているオリジナル・バージョンを好む傾向が強くなり、テレビ放送でも表現の修正がないものを流すことが増えた。

Manga と日本文化

ポドゥさんと Manga の関係についても尋ねた。ポドゥさんは、マンガは基本的にフランス語や英語で翻訳されたものを読むそうだ。

日本語で読むときは半分勉強のためです。楽しんで、こたつの中でみかんを食べながら読みたいのは日本語じゃない。作者が選んだ言葉で読むのが楽しいけど、話の内容を完全に理解していない可能性が十分にあります。

ポドゥさんは日本語が非常に堪能であるので、これは意外であった。その理由のひとつは、最近の漫画、たとえば『呪術廻戦』『Dr.STONE』などでは複雑な設定で日本語が母語の者にとっても難しい表現も少なくないからだという。

Manga に現れる日本特有の文化を不思議だと感じる事が多くあったそうである。たとえば登場人物が「炊飯器がないと生きていけない」と発言して異常なほどお米に執着していたり、子どもが1人で登校したりといった場面はポドゥさんにとっては奇異に映った。実際に存在する文化や習慣なのか、Manga 独自の要素なのか、それを区別することは難しく、フィクションを現実だと勘違いしていたことが多々あったという。

実は、タヌキは本当に存在する動物だと知らなかった！ 日本の妖怪だと思ってた、狐、カッパ、タヌキ（笑）。「タヌキ見たことないの？」って聞かれて、「もちろん見たことないよ、私そういうの信じてないし」って。多分みなさん日本人には見てすぐ分かるようなもの、何の妖怪が画面に現れたとか、新宿駅だとか、一般知識みたいに扱われているようなものが、フランス人にとってはさ、これほんと！？ 本当の場所だったの！？ って。新宿駅に初めて行った時めっちゃ感動したよ。なんかアニメみたい！って。逆だけど（笑）

作品に現れる日本特有の文化が興味を引くこともあり、制服、刀や侍などフランス人にとってはエキゾチックに感じられ、人気があるという。実際、フランスで開催されるジャパン・エキスポでは日本刀の模型などが売られており、ボドゥさんのお宅にも飾られている。ボドゥさんが特に好きな日本文化は花見だそうだ。

紅葉も花見もそうだけど、目的が花を見ることなのに、わざわざ屋台を出して、花火をあげて、着物着てやってるんだよ！ジーンズと T シャツでお花をみて綺麗だなんて、自然をただ楽しむだけじゃなくて。家族や友人、みな集まって、周りには屋台とかゲームとか金魚すくい、お寺とかもあつたりして、祭りの風景自体にすごい感動する。着物着てるとキヤあって。これだけの雰囲気を出せるってめちゃくちゃ素敵だなと思った。

花を愛でることだけでなく、家族や仲間と楽しむことやお祭りの雰囲気などさまざまな要素が含まれている点に感激するのだという。

異文化の中で暮らすこと

Manga に魅了され、そこから日本文化に興味を持つ外国人も増加してきている。しかし、漫画やアニメが好きだからといって、日本に住もうと思うかと言われれば、そうはならないとボドゥさんは言う。

多分周りの友達と比べたら、自分はそれほどオタクでもない。主題歌を聴いたらどのアニメかすぐに分かるレベルじゃないし、作品に関する情報を探りに行くわけでもないし。まあグッズはいっぱい買うけど、それほどのオタクさはない。でもそのフランス人のオタク友達の中で、日本に来て日本に住んでいるのは私だけ。彼女たちもアニメのことめっちゃ好きで、めっちゃ調べて、私に神谷浩史 [人気声優] の名前を教えてくれて (笑)。色々教えてもらった側なんだけど、結局、彼女たちには日本に住みたい気持ちは生まれなかった。私よりオタクなのに。

Manga を愛するという気持ちが大きいからといって、日本に住めるようになるわけでも、日本語が上達するわけでもないという。

文化を好きな気持ちも大事だけどさ、ほんとに実際にどうなるかは行ってみないとわからないというか。うちの友達も一回日本に来てくれたけど、みんなフランスに戻りたいって言ってたし、私だけは戻りたくないって言ってた。外国語を勉強すると、この気持ちになるのがすごく怖いんだよね。特に外国行きたい場合は、もし自分の行きたい国に行けたとしても、実際はあんまりいい印象を受けなかったり、自分の国に戻りたくなったり、今までの「好きだという」気持ちはなんだったんだろうみたいなのが。

憧れから外国に飛び込んでみても、自分の中の持っていたイメージと実際の姿、たとえばその国の生活習慣や価値観、コミュニケーションの間に様々な齟齬が生まれる。そういった理想と現実の差に苦しむことは、異文化に興味を持ったり、外国語を学んだり、実際に国を訪れたりしたことのある人なら、誰しもが経験したことのある悩みであろう。

日本人の当たり前は、私の当たり前じゃないってことを、今でも毎日感じる。10分前に待ち合わせ場所に行くのも分かんないし、みんなが美味しく食べている魚も目がついていると食べられないし(笑)。バスの乗り方なんかでも困ったりしてさ、何でもかんでもわからないこといっぱいあるじゃないですか。けど、Mangaは「日本に住むことを」続ける力になっていったんだよね。あれだけ好きだった日本文化を実際に体験すると難しいことばかりだけれど、好きだったことを忘れるなっていう後押しにはなっていた。

Mangaという逃げ道があったから日本での辛いことも耐えられた。

日本に来て辛かったことはいっぱいあったけど、それでも日本が好きだし、離れたくない。辛いことの中にも楽しさがいっぱいあるし、うまくいくとすごい嬉しいんですよ。辛くなったら、パンを食べたり、アニメイトに行ったり、自分の慣れ親しんだ文化や好きなものに囲まれながら、挫けても、もう一度挑戦してみる、それでうまく行った時のあの気持ちって最高じゃないですか？

一方で、異文化の中で暮らす楽しさについても教えてくれた。

箸で食べる方が好きなんだよねとか、フランスでは家の中で靴は脱がないけど、靴を脱いだ方が快適だなとか、この気持ちを表すのにこの日本語は最適だけど、フランス語にはないなとか、色々自分の生活の中で文化を混ぜて自分特有の新しい文化が出来上がることって、私はすごい楽しい。いろんな文化からいっぱい学んで、もっと広い世界ができるのが世界学っていうか、すごいんですよ。それが Manga や映画や芸術で発信されるっていうのが余計に素晴らしいって感じる。

好きな気持ちだけで生きていけるほど現実は甘くないが、Manga への愛が「推し」と同じ生活ができる幸せを感じさせ、諦めない心につながり、ボドゥさんの日本生活を支えているといえる。そして、自分の国に留まっているだけでは知り得なかった新しい文化に触れ、それを取り入れて自分独自の世界を作り上げていくのである。

インタビューを終えて

今回のインタビューから、日本で生まれた漫画やアニメが、世界で愛される文化となっている様子を改めて知ることができ、互いに異なる文化で育ってきた人々が、ある特定の文化を共有できることが、とても素敵なことだと感じました。好きなものに対する情熱だけで異国の地に住むことはできない、しかし好きなものに対する情熱があるからこそつらいことも耐えられ、自分独自の世界を作り出していくのが楽しいというボドゥさんのお話は、異文化に関心を持ち、海外を訪れてみたいと思っている私にとって、とても励みになり、勇気を与えてくれるような内容でした。今回は貴重なお話を拝聴することができましたこと感謝しております。ありがとうございました（鈴木葵）。

海外でもアニメや漫画が人気だということは認識していましたが、今回のインタビューを経て、アニメや漫画の日本文化としての可能性をさらに実感できました。インタビューを受けてくださったボドゥさんは明るい人柄で、言語の勉強などに対して常に向上心をもつ素敵なお方でした。お互いの漫画やアニメの推しの話も楽しくすることができ、私にとって貴重な経験になりました。好きなものと同じ生活をするために慣れない文化を持つ海外の地で過ごすという決断は、決して容易なことではありません。しかしそれを乗り越えていくボドゥさんの熱い思いと計り知れない努力に心を動かされました。お忙しい中お話し

を受けてくださったボドウさんに重ねてお礼申し上げます（竹下百香）。
(Faustine Baudoux 静岡市国際交流員)

ボドウ先生の『県大×おまちゼミ』のビデオはこちら



スペインにおける日本文学

森 直香

スペインにおいて日本語からの直接訳で日本文学が翻訳・紹介され始めたのは1970年代のことである。1968年に川端康成がノーベル賞を受賞したことで、日本文学への注目が増し、1970年には『古都』『伊豆の踊子』『山の音』の日本語からの直接訳が出版された。これを皮切りにさらに7冊の翻訳が世に出たが、ほとんどはまだ英語、フランス語、ドイツ語からの重訳であり、直接訳が本格化するのは1990年以降となる。一方で、三島由紀夫の作品も盛んに紹介された。また、1978年には精神科医で評論家のバリェホ・ナヘラが三島における死のテーマについて分析した『三島、死ぬことよろこび』を著した。三島の場合、作品そのものの評価に加えて、本人の劇的な死も切腹の習慣と結びつけられて注目を集めており、日本文学にエキゾチックさを求める受容態度が指摘できる。俳句の本格受容が始まるのもこの時期である。メキシコのノーベル賞詩人オクタビオ・パスが林家永吉と松尾芭蕉『奥の細道』をスペイン語に訳すと、スペイン語圏で俳句が注目されるようになった。スペインでは1970年に出版され、この時期から俳句が本格的に紹介され始める。

1980年代に入っても川端、三島、そして俳句は盛んに受容された。加えて、1970年代後半から古典作品の翻訳も行われるようになり、この頃からイペリオン社が日本文学の出版を手がけはじめた。この出版社は詩と東洋文学に定評があり、イペリオン社からの出版は日本文学が権威ある文学の仲間入りをしたことを意味する。古典の出版では特に井原西鶴作品が目立つが、これを俳句への興味と連動した動きと解釈することもできる一方で、欧米では伝統的に東洋の文化は性的関心と結びつけられがちであり、この背後にも日本文学に性愛のテーマを探そうとする姿勢が隠れている可能性も否めない。三島の自殺への注目同様、日本文学の中にステレオタイプのなエキゾチックさを読み取ろうとしているのである。

一方で、児童書の翻訳も始まり、長崎源之助、岩村和朗の作品が出版されたが、これには日本のアニメーションの受容が進んでいたことも関係しているだろう。1960年代後半頃から日本製アニメの放映が始まり、1970年代は『アルプスの少女ハイジ』『母を訪ねて三千里』『キャンディ・キャン

ディ』『マジンガーZ』などの作品が人気を博していたのである。

1990年代には、日本文化への関心が高まりを見せる。日本文学への興味も増したが、その背景には1994年に大江健三郎がノーベル文学賞を受賞したことがある。それ以前の大江作品のスペイン語訳は1989年出版の『個人的な体験』のみであったが、受賞後は、9作品が翻訳された。ノーベル賞という欧米先進国による評価によって受容が進んだといえる。加えて、俳句受容において、重要な試みがなされた。日本の大学で博士号を取得した日本研究者フェルナンデス・ロドリゲス＝イスキエルドが中心となり、『池のあけぼの』と題したスペイン人詩人32名の句集が出版されたのである。さらに、1990年代おわりから2000年代にかけて、アーサー・ゴールデン『さゆり』、アレサンドロ・バリッコ『シルク』がスペインを含む世界でベストセラーとなり、その後、映画化をされ、特に『さゆり』は世界的なヒットを記録した。どちらも外国人による日本を題材とした作品で、これらの作品の成功により、一般読者の目が日本に向けられたであろうことは想像に難くない。こうして日本文学はスペイン人読者にとって身近なものになりつつあった。

ここまでは、欧米諸国における評判をうけて日本文学が受容される傾向があった。ノーベル賞という西洋世界が与える権威により川端と大江の翻訳が増加し、ノーベル賞作家パスの評価をきっかけに俳句に注目が集まった。1990年代にはイタリアでよしもと作品がベストセラーとなったが、それによりスペインでも『キッチン』『N.P.』が翻訳されたのもその一例である。カサノヴァはパリが世界文学の首都でそれまで知られていなかったテキストに価値を与える場であると述べ（カサノヴァ『世界文学空間—文学資本と文学革命—』岩切正一郎訳、藤原書店、2002年）、モレッティは「中核」となる地域（英、仏）の文学に「半周辺」と「周辺」の地域の文学が「干渉」と主張したが（『遠読—「世界文学システム」への挑戦—』秋草俊一郎ほか訳、みすず書房、2016年）、1990年代までのスペインの文学空間は「中核」の「干渉」を受け、それらの国々が価値を与えた日本文学作品を受容したといえる。

このような状況を一変させたのが、村上春樹である。村上は2000年代以前に他の欧米諸国ではすでに地位を確立していたが、スペインは無名の存在であった。ところが2005年に翻訳・出版された『ノルウェイの森』が大ヒットをおさめると、一気にスペインでベストセラー作家の仲間入りを果

たす。それだけではなく、村上文学をきっかけに日本文学に親しむ読者も増加し、日本文学は一部の日本好きのためのものでなく、一般の読者愛好家のためのジャンルとなった。多くのスペイン人読者は村上文学が若者の成長や都市生活の孤独といった普遍的なテーマを扱う「西洋的な」小説でありながらも、伝統とテクノロジーが混とんと混じり合う大都市「トウキョウ」や自殺のテーマなどの日本らしさを兼ね備えている点に大いに魅力を感じた。登場人物はスペイン人読者と同じ問題を抱えており共感できる存在であるが、日本文化のエキゾチックさも失われてはいないのである。

近年の状況であるが、日本文学の出版は増加し、幅広い分野のものが翻訳されるようになってきている。たとえば、2018年は芥川龍之介、太宰治、夏目漱石などの文豪の作品、川上弘美、三浦しをんなどの現代作家のもの、そして赤川次郎のミステリー、筒井康隆の短編など様々なジャンルの作品が翻訳されている。また、他の言語に先駆けてスペイン語訳が発表されるケースも出始めている。さらに、サトリ出版、クアテルニ社といった日本文学や東洋文学を専門とした小規模な出版社も登場した。たとえば、サトリ出版は現在までに100タイトル以上の日本文学を出版し、2019年にはスペインと日本の友好に貢献した功績で外務大臣表彰を受けている。加えて、2014年には電子書籍を中心に扱うチドリ・ブックス社が設立され、多くの日本文学の翻訳を世に送り出しているが、この出版社も今後、日本文学受容に大きな役割を果たしていくと思われる。

このように、2000年代以降、スペインでは他の欧米諸国の評価には必ずしも依存しない形で日本文学の受容が進められている。つまり、他国の受容に追随する段階から、スペイン人読者独自の評価によって作品を受け入れる成熟段階に入りつつあるのである。グローバル化研究が様々な分野で進むにつれ、欧米に起源を持つ文化が各地のローカルな文脈に適応し「土着化」していく現象が注目されるようになり、たとえば、ワトソンはマクドナルドの東アジアにおける展開において「土着化」が見られると指摘した（ワトソン『マクドナルドはグローバルか—東アジアのファーストフード—』前川啓治ほか訳、新曜社、2003年）が、文学作品の受容においても類似の傾向が見られ始めていると言えるのではないだろうか。「周辺」の文学空間はただ「中核」からの「干渉」を甘受するのではなく、「土着化」などの形で抵抗するのであり、村上作品の評価が独自の過程を経たことや日本や東洋を専門とする小規模出版社の登場にその萌芽が見いだせるので

ある。従来から、スペイン文学は他国の潮流を遅れて受容し、独自の形で開花させてきたが、日本文学の受容においても同種の現象が起こる可能性があるといえる。

(もり・なおか 静岡県立大学国際関係学部准教授)

詳しく知りたい方は以下をご参照ください。

森 直香「スペインにおける日本文学の受容概観」『スペイン学』第22号、京都セルバンテス懇話会、2020年、pp. 84-96。

森 直香「スペインにおける村上春樹の受容に関する予備的考察－『ノルウェイの森』を中心に－」『国際関係・比較文化研究』第11巻第1号、静岡県立大学国際関係学部、2012年、pp. 109-127。

静岡県で楽しむフランスとヨーロッパの美食

マルティノ・ロベル＝ジル

翻訳 静岡県立大学国際関係学部学生
原田康平

静岡県は自然豊かな「美食の街」で、肉、海の幸、野菜や果物などの質が高い食材が豊富にあります。そのため、静岡県には質の高いレストランや料理人がたくさんあり、日本全国、さらには海外からも愛好家たちが訪れます。それ以前は、長い間、腕の良いシェフは東京に集中していましたが、最近では東京の企業が地方で高級レストランを直接出店したり、スポンサーとなって経営に参加するようになってきました。そのような中、日本の中心に位置する静岡県は各地からアクセスがしやすいため注目されています。

静岡県のレストランと料理人を全て知っているわけではありませんが、自身が味わって本当に素晴らしいと思ったお店の一部をご紹介します。

まず、みなさんが驚くほど質の高いケーキやパンを提供するお店を以下に挙げます。

- アボンダンス Abondance (浜松市中区住吉 2-14-27 TEL:053-473-8400)
東京のダロワイヨ Dalloyau で長年修業したアルザス人のベルナル・エベルレのケーキ店です。
- パティスリー・ル・テニエ Patisserie Le Teignier (静岡市葵区新通 1-6-24 TEL:054-266-6192)
東京のピエール・エルメ・パリ Pierre Hermé Paris で長年修業したブルトン人のルドヴィク・ル・テニエが営むケーキ店です。
- パティスリ・ジュードゥ ミュゲ Patisserie Jour du Muguet (藤枝市岡部町内谷 900-4 TEL:054-667-5104)
伝統的なビスケットとケーキを提供しているお店です。オーナーはフランス・ブルゴーニュ地方シャロン＝シュル＝ソーヌでMOF(フラン

ス国家最優秀職人章)の肩書を持つパティシエの下で腕を磨いた人物です。

○Boulangerie 伊藤屋 (静岡市葵区西千代田町 23-11 TEL:054-248-2264)

伝統的で本格的なフランスパンを提供するお店です(歯ごたえを楽しむためには、丈夫な歯が必要です!)パン職人はスイスとフランスで長年修業をした人物です。

○レスタミネ エマ L'estaminet Ema (浜松市東区西ヶ崎町 1088-1 TEL:053-433-7700)

最高級のパンと伝統的なフレンチ・ビストロが一度に楽しめるお店です。

次はフレンチ・レストランを紹介しますが、値段が張るお店が少なくありません。

○西欧料理サヴァ カ Çava. K. (菊川市沢水加 791-11 TEL:0537-37-1820)

日本有数のジビエ料理を専門に扱うフレンチ・レストランです。満足すること間違いなしです!

○KAWASAKI (カワサキ) (静岡市常磐町 1-8-5 TEL:054-272-0066)

狩猟免許を持つシェフが仕留めたジビエや、自ら収穫した山菜・野菜などの地元の食材を使用した質の高い料理を提供しています。

近年流行っているビストロとワインバーも見逃せません!

○キャラバン Caravin (静岡市葵区鷹匠 2-25-17 TEL:054-255-3539)

長い歴史を持つフレンチ・ビストロで、ブーダン [豚の血と脂による腸詰] のような定番料理を提供しています。

○ラ・ソムリエール La Sommelière (静岡市葵区御幸町 7-5 TEL:054-266-5085)

良心的な値段で日本酒とワインを提供・販売するバー兼ビストロです。オーナーはワインと日本酒のソムリエで腕利きのシェフでもあります。

○Restaurant Ninosa (ニノサ) (静岡市葵区人宿町 2-5-2 TEL:054-251-3502)
訪問の価値があるフレンチ・ビストロです！

○Shimadining Bar ひづき (島田市本通 1-9-19 TEL:050-5485-1581)
このお店はビストロでありながら、居酒屋でもあり、手ごろな価格で
定番料理を提供しています。

○サケトバ (静岡市葵区鷹匠 1-2-5 TEL:070-3247-2396)
最高に美味しいパテとテリーヌも提供しているワインと日本酒のバ
ーです。

手ごろな値段で美味しい料理を食べることができるイタリアン・レスト
ランは多くあります。その中でも、私のお気に入りのレストランを紹介し
ます。

○ソーロイオ Soloio (静岡市葵区伝馬町 9-7 TEL:054-260-4637)
ミラノ地方の料理のお店です。

○オステリア・イル・カスターニョ Il Castagno (静岡市駿河区用宗 4-8-24
TEL:054-659-2557)
プーリア地方の料理のお店です。

○イルドゥリット Il Dritto (島田市本通 1-9-1 TEL:0547-33-0790)
上質な料理を提供する静岡有数のイタリアン・レストランのひとつで
す。

上記に記した分類以外で、少なくともあと二つ行く価値のあるレストラ
ンを紹介します。

○テキーラダイナー Tequila's Diner (静岡市葵区人宿町 2-4-9 TEL:054-255-
7595)
炭火で焼いたハンバーガーが食べられる静岡県で随一のお店です。

○酒場 13Anchorz (パブ ジュウサンアンカーズ) (静岡市葵区七間町 11-5
TEL:090-8452-4503)

さまざまな国の料理が食べられます。中でも静岡県産のシイラのフィッシュアンドチップスは絶品です。お店の場所が少し分かりにくいので要注意です！

最後に、今回私が紹介した静岡県のレストランや料理人はほんの一部に過ぎません。観光で訪れる方も、短期または長期滞在の方も、視覚、聴覚、嗅覚を研ぎ澄まして、自分の足で新たなお店を発見してみてください！皆さんが素晴らしいお店と出会い、静岡の食を楽しんでいただけることを心から願っています！

(Martineau Robert-Gilles 美食ジャーナリスト)

ロベル先生のウェブページはこちら



ロベル先生の『県大×おまちゼミ』のビデオはこちら



パリ万博使節団の足跡と静岡—渋沢栄一の見聞

宮崎晋生

静岡とフランスとの繋がり

どちらかといえば「文化」よりも経済近代化という「文明」の話になりますが、静岡とフランスの関係が日本の近代化に貢献したことは一般にあまり知られていなかったのではないかと思います。「日本近代資本主義の父」と言われる渋沢栄一を取り上げた 2021 年 NHK 大河ドラマ『晴天を衝け』で、明治維新直後の静岡にフランス帰りの渋沢が奮闘する場面が描かれ、ようやく一般市民に知られるようになりました。

静岡・フランス関係のきっかけとなったのは幕末 1867 年に開催されたパリ万国博覧会です。江戸幕府 15 代将軍徳川慶喜の弟徳川昭武を代表とした使節団が、借款の交渉や欧州各国への江戸幕府の正当性アピールを狙って派遣されました。実は渋沢を含めたこの使節団メンバーが、明治維新直後の静岡にフランス帰りの経験や知識をもたらしているのです。外国奉行向山一履（黄村）は静岡学問所頭取、その部下杉浦譲はその教授に、田辺太一は沼津兵学校教授に、また昭武の世話役であった山高信離は相良奉行といった要職に就きました。渋沢は後述する「商法会所」という銀行と商社を兼ねた組織の頭取となりました。このように使節団幕臣は帰国後、駿府（静岡）藩に出仕、渡欧の見聞や経験が最初に静岡で生かされたと言えましょう。その後、渋沢をはじめとする多くが人材不足の明治新政府に引き抜かれ各分野で活躍しました。

パリ訪問の足跡と当時のフランス企業

使節団パリ訪問の足跡は今日でも残存しています。スエズ運河建設中のところエジプト・アレキサンドリアから船で到着したマルセイユより、鉄道でリヨンを経由して Gare de Lyon に到着します。移動に鉄道を利用し、国内の人・物の移動を大量・迅速かつ正確に行える手段が国内に整備され、一行を驚嘆させたことは想像に難くありません。万博会場は現在の Champs de Mars 公園、当時楕円形の特設会場が建造され当時最先端の技術展示のみならず各国の風俗文化が展示、一般大衆の耳目を引きました。万博終了後は、昭武の留学滞在費用の節減のため、当初投宿していた絢爛豪華な Grand Hôtel からリトアニア貴族が所有するブローニュの森に近いペル

ゴレーズ街の物件を借り、1868年9月の離仏まで居を構えました。その近所シャルグラン街にはフランスとの関係悪化を打開するべく遅れて合流した外国奉行栗本鋤雲の館がありました（フランス語に堪能だった栗本の手記『暁窓追録』によれば滞在中ナポレオン法典研究や同行した商人清水卯三郎の商事裁判臨席等、渡仏経験がその後ジャーナリストとしてのキャリアに影響しています）。万博会場以外これらの建物は現存し、住居や事務所として利用されています。

折しも使節団が訪問した頃には、フランスではナポレオン3世のもとで商工業振興が図られていました。1840-50年代から鉄道網敷設ブームがあり、万博時にはパリを中心とした今日の主要幹線ネットワークが民間企業によって整備されました（1938年SNCFへ統合・国有化）。また、その機材や設備を供給する製鉄業等の企業、銀行も当時からありました。たとえば現在「世界鉄道車両メジャー」であるAlstomの前身アルザス建設機械、現在も電力関連機器の多国籍企業シュナイダー・エレクトリック、今日では高級機械式時計メーカーのブレゲも当時通信機を製造、銀行ではCredit Lyonnaise, BNP Paribas, Société Générale, Caisse d'Épargne（労働者貯蓄銀行）といった今日まで続くメガバンクがこの頃すでに設立されていたのです。特にSociété Généraleは幕末徳川幕府の借款窓口となっていました。

渋沢栄一と静岡：実業家としての第一歩

さて、フランスの資本主義に直接触れてきた渋沢は、帰国後程なく徳川慶喜への帰朝報告をきっかけに明治元年末～翌年秋まで静岡に滞在、藩庁から請われ経済復興の仕事に携わりました。パリ滞在中、渋沢は案内役の銀行家フロリヘラルド（フリーリ・エラル）より証券取引所にて債券投資の手ほどきを受け、身分にかかわらず社会から広く多様な「資本」を集め社会に必要な大事業を可能にする「合本主義」を学びました。帰国後渡仏時の見聞を最初に生かしたのが、まさに静岡「商法会所」です。

「商法会所」は主として駿府商人と藩庁（公金：石高拝借金）からの出資で、農商業などへの融資を行う金融機能と、物産品や肥料などの売買を行う商社機能を併せ持った「コンパニー」として運営されました。まさに今でいう官民共同出資による経済再生プロジェクトです。これにより、明治維新で混乱する藩内の経済状況を打開、養蚕業振興や茶業振興・牧之原など茶畑開拓を通じて無禄武士の雇用対策も実現しました。繊維や茶業とい

った静岡県経済のその後の近代化を支える産業の基礎がここにできました。

大河ドラマ放映が終了、これらの足跡がまた「忘れられた歴史」に戻ることを筆者は危惧しています。19世紀後半に日欧の歴史が大きく動く中、まさしくフランスで学んだ「合本主義」に基づいて、日本の近代資本主義の最初の試みがこの静岡にて行われたのです。VUCA (=Volatility 突発性, Uncertainty 不確実性, Complexity 複雑性, Ambiguous 曖昧) は幕末/明治初期も今も同じ、我々もこの歴史から学ぶことは多いのではないのでしょうか。

(みやざき・くにお 静岡県立大学国際関係学部准教授)

参考文献

- 岡村龍男(2021)『渋沢栄一と静岡 改革の軌跡をたどる』静岡新聞社。
栗本鋤雲『暁窓追録』井田進也校注(2009)『幕末維新パリ見聞記』岩波文庫。
佐々木聡(1994)「渋沢栄一と静岡商法会所」『渋沢研究』No.7。
佐々木聡(1999)「渋沢栄一と静岡-商法会所と常平倉」『静岡の文化』No.56。
静岡県(1996)『静岡県史 通史編 5』。
静岡県(1989)『静岡県史 資料編 16』。
渋沢栄一述、長幸男校注(1984)『雨夜譚』岩波書店。
渋沢栄一記念財団『渋沢栄一伝記史料』
<https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/>
宮永孝(2000)『プリンス昭武の欧州紀行』紀伊国屋書店。

1867年パリ万国博覧会使節団ゆかりの場所はこちらをご覧ください。



古いパリを歩くこと、発見すること

宮下志朗

コロナ禍が収まる気配がありません。オンラインと対面、大学も授業の方法で悩んでいます。わたしは教師生活の最後の年月を、「遠隔教育」をメインとする放送大学で過ごしました。とはいえ、「面接授業」と呼ばれる対面型の授業もあり、専任は全国各地に出かけて集中講義をします。学生さんと直接ふれあえる貴重な機会で、何十個所も訪れました。でも、残念ながら、静岡県とはそうした縁はありませんでした（ただし「静岡学習センター」は三島にあるのですが）。

ところが、思いもかけず静岡県立大学から、この状況ですが対面授業をぜひとの依頼があり、引き受けたという次第です。授業のテーマの1つが「歩きながら、古いパリを発見する」、城壁の痕跡などを求めて、パリの街を歩きながら、思わぬ発見に驚いたり、都市の歴史に思いを馳せるといったものです。パリの街角には、今日でもさまざまな歴史的なモニュメントが、つまり「記憶の場所」が、さりげない形で残っているのですが、遊歩する人々はなにも気づかずに通りすぎていきます。それらの写真を次々と映しながら、観察力を刺激しつつ、原稿なしで、かなり自由にお話をしました（*）。本当ならば、静岡歩きの感想も挟みたかったところですが、コロナ禍で、街に繰り出すことはできませんでした。

後日、授業アンケートをまとめたものを頂戴しました。これを参考にし、こちらが言い足りなかったことなどを少し書いてみましょう。

授業では、写真とともに「古地図」（16世紀半ば）も紹介しましたが、「物乞いが描かれている」、「船を人力で上流に引っぱっていた」等々、大切なことに注目してくれました。人々の営みが描かれている古地図は、この上なく貴重な資料です。お薦めのサイトがありますから（**）、楽しみながら、さらに学んでください。ヨーロッパには「洛中洛外図」というジャンルもありませんから、なおさら価値あります。

さて街歩きですが、「街の小さな段差や階段などから歴史がわかる」とのコメント。まさにそのとおりで、日本でも「ブラタモリ」が、これを実践していました。初期の番組のほうが、地形の変化や街のでこぼこに対する

タモリの知的好奇心を、十分に尊重していた印象がありますね。いずれは、パリ城壁編を制作して欲しい！

道の半分が階段状になっている「マルブランシュ通り rue Malebranche」の写真を覚えている学生さんも多いでしょう。実は、わたしが中世の城壁跡の探索にのめりこんだのも、よく通るこの坂道の奇妙な形状が不思議でならなかったからです。時間の関係で、お話しできませんでしたが、この変てこな通りはカルト的な人気があるらしく、映画にもちらほら出てきます。たとえば、ウディ・アレン監督の『ミッドナイト・イン・パリ』(2011年)。売れっ子の脚本家なのに作家志望のアメリカの若者が、憧れのパリで、真夜中に、1920年代のパリにタイムスリップ、ヘミングウェイ、フィッツジェラルド、ダリ等々と交友するおとぎ話で、必見です。何度見ても楽しいので。ついでに、ヘミングウェイ『移動祝祭日』も読みましょう。この映画では、パリの場所があちこち出てきて、わくわくしますが、「マルブランシュ通り」も真夜中のシーンでちゃんと登場しますから、見逃さないように。パリに行こうと思っても行けませんし、なによりも良き時代のパリを偲ぶには、まさに最適の映画でしょう。

さて次。「新しい標識の上に、古い標識がある」ことに感嘆した学生さんが多数いました。そうなのです、歴史的に価値ありとして意識的に残しているのです。現在の名称が「X通り rue X」でも、すぐ上の表示を見ると「X堀割通り rue des Fossés X」と昔の名前が出ていて、城壁沿いの堀割が道になっていることが一目瞭然といたお話しをしました。やはり、古いものを消してはいけませんよね。うっかりして、授業では重要なことを言い忘れました。古い表示は、かならずといっていいほど、高い場所にあります。なぜ高い場所なのでしょう？ これは「馬車目線」に合わせているのだと思います。昔の馬車の運転席は、トラックなどを除けば、現在の車の目線よりは高いですよ。歩行者ではなく運転者の目線に合わせているのでしょう。ともあれ、ジャンヌ・ダルクのパリ攻撃のモニュメント(サン＝トノレ通り)もそうですが、パリを歩くときは、足元に気をつけながら目線を上にやると、興味深いものが発見できます。

セーヌ右岸、リセ・シャルルマーニュ横の城壁は、中世の石工のサインが判読できる貴重な観測地点だったのですが、訪れるたびにかすれていて、洗浄したのは明らかだともお話ししました。このことに関しても、「石を洗

う行為で過去の記憶がなくなってしまう」と、こちらの意図を正確に理解したコメントが寄せられました。

要するに、ものごと、なんでもすべすべに、綺麗にすれば良いというものではないのです。人間だって同じでしょう。わがモンテーニュ先生が『エッセー』で書いています。「老いを受け入れた醜さは、わたしが思うに、塗りたくったり、すべすべにした老いよりも、老いぼれてもいなければ、醜悪でもない」（第三巻五章「ウェルギリウスの詩句について」拙訳、白水社）と。でこぼこでも、汚くても、それをみだりに消してはなりません。「老いを受け入れた醜さ」の全体が「歴史」なのでもあります。ちなみに、モンテーニュ（1533-1592）はボルドーの人ですが、パリも大好きでした。若い頃に遊学していたのかもしれませんが。そのパリについて、こう述べています。

子供のころから、わたしはパリに魅せられていたのだ。わたしはパリそのものが好きで、余分にごてごて飾られたよりも、そのままの姿のほうがはるかに好きなのだ。そのいぼやしみまでも、優しく愛しているのである（第三巻九章「空しさについて」）

「いぼやしみまでも」好きなパリ。実を言うと、モンテーニュはここで、パリもその犠牲となっているところの、フランスという国の「不和分裂」の解消を、つまりは和平を祈願しているのです（「宗教戦争」の時代ですから）。それが決して偏狭なナショナリズムに発するものではないことも、付け加えておきます。直後に、「人類に共通の普遍的な結びつきを優先して、国民としての結びつきはそれより後に置く」とまで述べているのですから。授業では、（パリの）街角のでこぼこのお話しをしたわけですが、このような含みもあるということをお話していただきたく、書き添えました。

そして近代のパリでは、（入市税徴収用の）城壁の跡にメトロができたことに興味を持ってくれた学生さんがたくさんいました。だだっ広い跡地にできたから、このメトロの路線（2号線と6号線です）は、地下鉄ではなくて高架の部分が多いのです。いつかパリに行ったら、まずはメトロで城壁跡を一周してから、次は、ここをぐるっと歩いて回ることをお奨めします（1日ではきついから、2日使いましょう）。入市税関の建物なども残っていて、貴重な体験ができますよ。「いつか必ずパリに行こうとおもいまし

た」「パリに旅行した際には、城壁を見てみたい」といったコメントがいくつもありました。そうした日が早く訪れることを心から祈ります。

(*) 宮下志朗『パリ歴史探偵』(講談社学術文庫, 2020年)を元にしています(元版は2002年刊)。

(**) <https://urbanisation-paris.com/paris-vers-1550-le-plan-de-truschet-et-hoyau/>です。オリジナルの手彩色による古雅な趣が味わえます。こちらからもアクセスできます。



(みやした・しろう 放送大学客員教授)

宮下先生の『県大×おまちゼミ』のビデオはこちら



フランス海外県への誘い

シリル・メレザン

フランス語学習者に「フランスとは何でしょうか」と聞くと、「ガストロノミー」、「パリとその建造物」、「貴族」、「マナー」、「ストライキ」などの答えがよく返ってきます。

しかしながら、実際は、フランスは植民地時代の歴史から、多種多様な文化が合わさり、成っているといえます。フランスは、ヨーロッパだけでなく、アメリカ大陸、オセアニア、インド洋などの、世界の様々な地域に存在しているのです。

私は、フランス海外県のマルティニークで育ちました。フランス本土に住んでいた時は、あまり知られていないこの海外県文化を、友人たちと共有することをとても大事にしていました。

静岡県に住み始めてからは、学生や友人、先生方に、海外県（特にマルティニーク）の文化の独自性を見出してもらえることに、喜びを感じています。

13年前、観光で初めて静岡市を訪れました。大きさや街の雰囲気などが、私が学生時代を過ごした、北フランスのリール市と似ていると感じました。静岡県内に住み始めてからは、カリブ海のフランス海外県との類似性が多いことに、だんだんと気づき始めました。海の近くに山があること、魚介類を使用した料理、温暖な気候、みかんやメロンのなど果物です。

これらの共通点から、静岡県とカリブ海のフランス海外県との間には、様々な交流を持てる可能性があると考えています。

世界各地に存在するフランス領土には、「海外共同体」と「海外県」があります。

海外共同体は、経済および政治的に、ある程度の自治権を有しています。フランス領ポリネシア、ニューカレドニアなどの海外共同体は、非常に古い文化を持っており、これらの文化はヨーロッパによる植民地化以前から存在していました。

海外県は、全部で5県あります。グアドループ、仏領ギアナ、マルティニーク、マヨット、レユニオンです。フランス本土の13の地方圏と、全く同じステータスを持ちます。例えば、これらの5県はEUの一部であり、

ユーロを使用することができます。

今回は、マルティニークについて少しお話したいと思います。

マルティニークは、カリブ海にある熱帯の小さな島です。クリストファー・コロンブスが1502年にマルティニークを「発見」する前は、アラワク族、次いでカリブ族が住んでいました。この島の持つ素晴らしい植物相から、原住民は「マディニーナ (Madinina 花の島)」と呼んでいました。

ヨーロッパ人の侵入、フランス植民地化、奴隷貿易と奴隷制後の世界各地からの移住により、数世紀をかけてマルティニーク社会が形成されました。

カリブ海のような島と同様に、マルティニーク特有のクレオール語が生まれました。なぜなら、アフリカからの奴隷と、フランスからの入植者との間でコミュニケーションとる必要があったからです。マルティニークの公用語はフランス語ですが、現在でもクレオール語は日常的によく使われています。

フランス、サハラ以南のアフリカ、インド、中国、中東などの地域からの、移住により生じた文化的混合は、ユニークなクレオール文化とクレオールアイデンティティを生み出しました。

このアイデンティティは、芸術、料理、伝統的な衣装、イデオロギー、信条などの多くの分野に感じることができます。

マルティニークとフランス本土の文化は、多くの点で異なります。だからこそ、フランス文化の重要な部分である、海外領土がもたらす文化的財産に関心を寄せることは、とても面白いのだと思います。

(Cyril Melesan フランス語講師)

ローカルから見るヨーロッパ 国際関係学を学ぶ人へ

2022年3月30日 初版発行

編 集 浅間哲平・森直香
発 行 静岡県立大学国際関係学部ヨーロッパ文化コース
〒422-8066 静岡県静岡市駿河区谷田52-1 国際関係学部
電話 054-264-5255
印刷・製本 橋本印刷所

ローカルから見るヨーロッパ
国際関係学を学ぶ人へ

2022年3月30日 初版発行

編集 浅間哲平・森直香

発行 静岡県立大学国際関係学部
ヨーロッパ文化コース